

道 頓 堀

第 八 年 · 第 十 號



昭和八年十月廿五日
昭和八年九月廿五日
昭和八年十月一日
發行所 (每月一號發行)

口中殺菌劑

力大

口入リよ
病を病る入リよ
防を病る入リよ
ぎ防を病る入リよ
るすに快爽を精神

衛生錠

御愛用者へ

賞行大激增の
感謝大奉任にて

特許製本邦香水界第一位の

原料オリヂナル進呈

小瓶(金五拾圓)

但し先着拾萬人様限りです
今すぐ御申込下さい

進呈方法

力大1ル御愛用の證として

本剤定價金壹圓以上に相當する

空函(袋入十錠、甘罐に限り上包の
効能書、三十錠以上は空函)を
各種取合せ可

東京市日本橋區本天町

本舖 安藤井筒堂藥品部へ
御送り下されば直ちに右
オリヂナル香水を進呈致します



風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽 喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ざし北詰

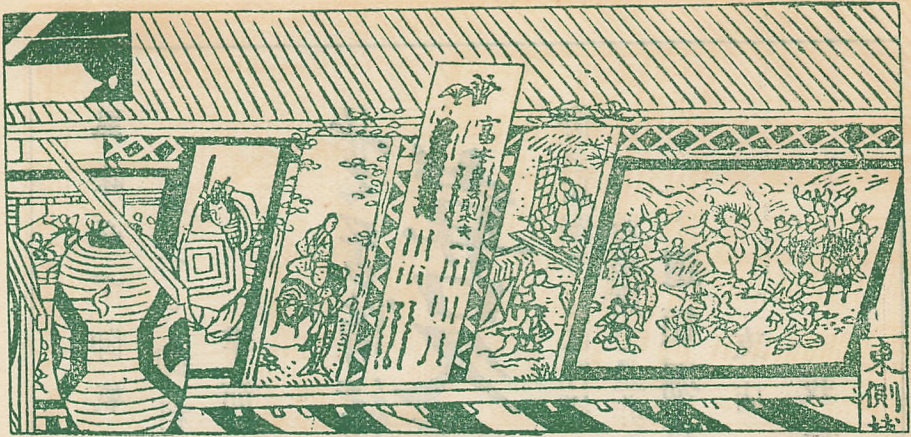
支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

戎橋 喜久屋北店

(心齋橋筋二丁目)





◆ 口 ◆

○十月の歌舞伎座○鷹治郎の紙治○幸四郎の定九郎、鷹治郎の勘平、幸四郎の由良助、福助のおかる○芳子のお澄、福助の清兵衛、市藏の加賀守、長二郎の作次郎○右團次の大名、宗十郎の太郎冠者、長三郎の醜女○鷹治郎の六條少將幸四郎の長年、魁車の堯心○十月の中座○小堀の了介、花柳の公吉、藤間の駿一○河合のお力、嘉多村の源七○梅島の俊策、花柳の白糸、梅島の欣彌○十月の南座、伊東の滋○喜多村の米子、英のみつ子○花柳の白糸、梅島の欣彌○十月の南座、伊元祿忠臣藏○十月の浪花座○前進座○中村翫右衛門の次郎吉、國太郎のお琴○長十郎の猿飛、翫右衛門の三好、國太郎のお秋○十月の文樂座○菅原傳授手習鑑、妹背山婦女庭訓、心中紙屋治兵衛○九月下旬の浪花座○雪州のウオング、伏見のファンニー○九月下旬の中座○家庭劇○島の娘○石河の初太郎、山田の鶴岡、東のお小夜、高田の藤間、小堀の仙波○十月の京都座享樂列車○ガラ政ごん○出船の唄○市之販と丑松

◆ 表 紙 ◆

河 庄 (一)

鷹治郎の六條少將 (スケッチ) (二)

- 鷹次郎丈を鞭撻するごいふこと.....高安吸江 (三)
- 天下一品の「河庄」と鷹治郎丈の至藝.....富田泰彦 (四)
- 忠臣藏拾遺.....西尾福三郎 (一〇)
- 由良之助の遊蕩振り.....倉田啓明 (二〇)
- 新忠臣藏に就いて.....食満南北 (七)
- 堂島繁昌記について.....大村嘉代子 (三三)



ジーペーロエイ

漫 畫 忠 臣 藏

妹 酒 富 田 英 三
春 井 田 三
平 七 馬
三 (三)

新 派 鸚 鵡 石

小 山 紅 露 (二)

瀧 の 白 糸 と 新 生 さ め 仲

小 島 孤 舟 (二)

梨 園 あ れ こ れ

長 野 吉 高 (三)

持 役 を 語 る

中 村 魁 車 ・ 市 川 右 團 次 ・ 中 村 宗 十 郎 ・ 助 高 屋 高 助 …… (三)

河 原 崎 長 十 郎 ・ 中 村 龜 松 ・ 河 原 崎 國 太 郎 ・ 中 村 翫 右 衛 門 …… (三)

花 柳 章 太 郎 ・ 梅 島 昇 ・ 小 堀 誠 ・ 英 太 郎 …… (三)

九 月 の 南 座 …… 山 口 廣 一 (三)

劇 評 「享 樂 列 車」試 乘 感 …… 鎌 谷 慶 二 (四)

續 街 で 拾 っ た 話 …… 曾 我 廼 家 十 吾 (四)

堀 正 夫 期 待 …… 森 田 信 義 (四)

天下の銘酒

シラユキ

白雪

まぐしに

やさる

白雪のあじ



摂津・伊丹港

伊丹小西本店



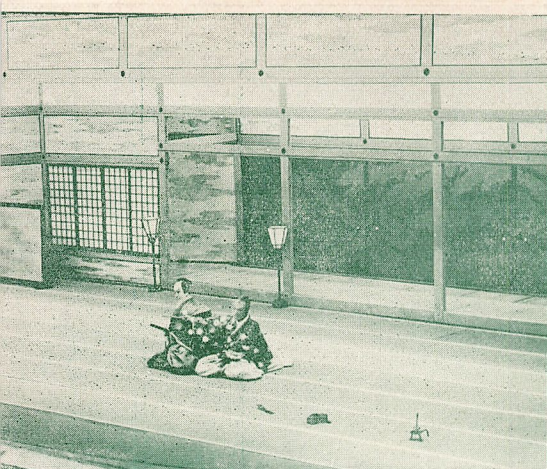
河江

十月の歌舞伎座

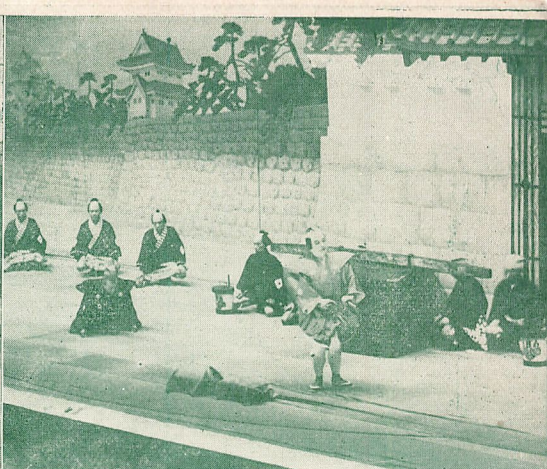
『心中紙屋治兵衛』

紙屋治兵衛

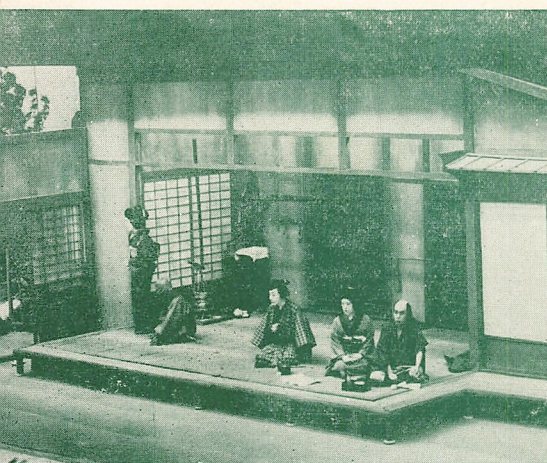
中村鴈治郎



松の間の刃傷の場



大先手進物の場



與市兵衛住家の場



山崎街道の場

『假名手本忠臣藏』

平右衛門 サア早ふ来い。

おかる 兄さん、来たが、何んぢやいなア。

平右衛門 髪飾りや化粧して、その日／＼は送れども、可愛や妹、わりや何んにも知られえなア。

おかる 何にも知らぬさは、

平右衛門 われが一日も早やう受け出されて孝行せうと思ふ親與市兵衛様は、去年六月二十九日人手にかゝつてお果てなされた。

おかる エ、

ト 恟りする、癢を起しかける。

平右衛門 コリヤ恟りするなア、まだあとにごえらいが有るわい。

おかる まだあとにあるさは。

平右衛門 われが譜け出されて添ふと思ふ勘平はナ、

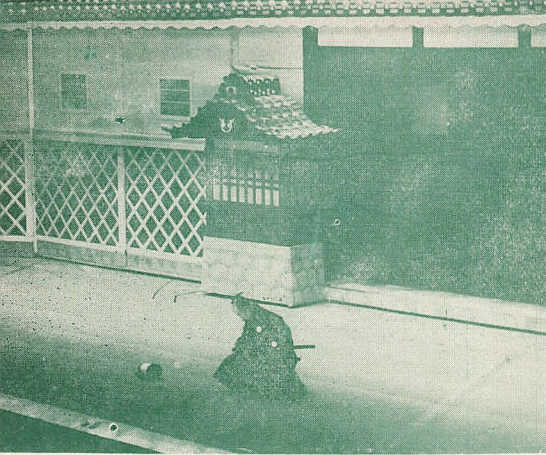
おかる 勘平さんはどうなされた。

平右衛門 その勘平はなア

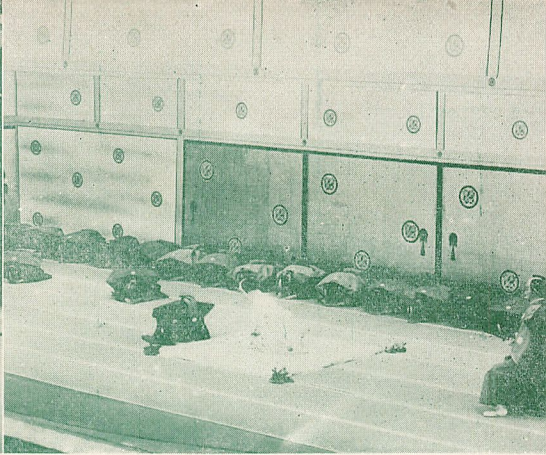
おかる 勘平さんはへ？

平右衛門 勘平は矢張り、勘平だ。

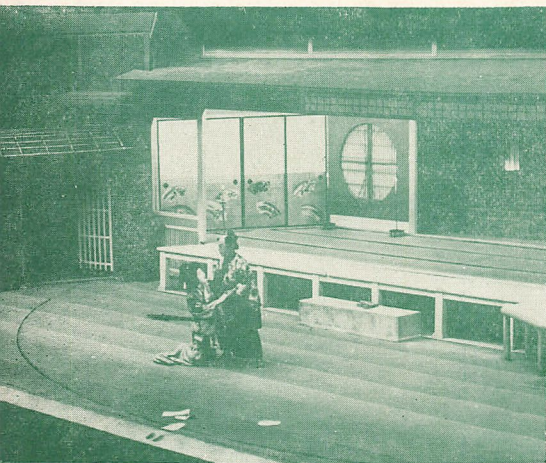
おかる ア、聞こえた、そんなら外によい女房さんでも出来たのかへ、



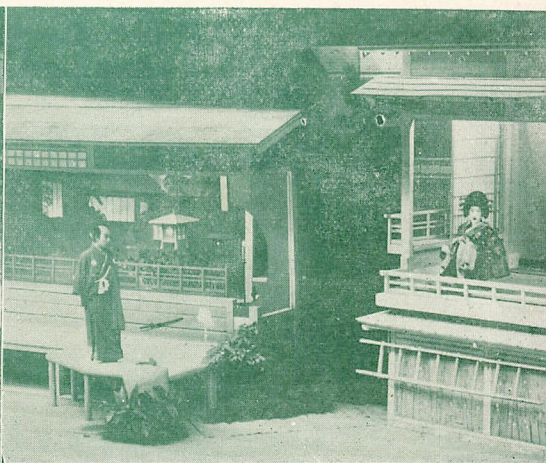
明 渡 の 場



扇 上 邸 の 場



祇 園 一 力 の 場



祇 園 一 力 の 場

平右衛門 そんな陽気な事ぢやねえわへ、

おかる そんなら何うさしやんしたへ、

平右衛門 腹を切つて死んだわへ、

おかる え、

胸りして瘡をおこす、平右衛門は介抱して氣をつける。

平右衛門 コリヤ氣がついたか、

おかる 兄さん勘平さんわへ、

平右衛門 又尋ねるが情けない、その勘平は友輩の面

晴れに腹を切つて死んたわい、

おかる ごうせう

平右衛門 尤もだ

おかる ごうせう、

平右衛門 道理だ、様子を話せば長いこと、おいたわ

しいは母者人、云ひ出しては思ひ出しては泣き、娘かるに聞かしたら、泣き死にするであらう、必ず云ふてくれるなぞのおたのみ、云ふまいとは思へども、とても通れぬそちが命、その譯は忠義一途にこり固つてござる由良之助様、勘平の女房と知られば受け出す義理もなし、元より色にはなほうけらず見られた狀が一大事。

◇十月の歌舞伎座◇



郎 四 幸 本 松 ・ 郎 九 定 斧

・ 部 の 畫 ・

◇ 藏 臣 忠 本 手 名 假 ◇



郎 治 鷹 村 中 ・ 平 勘 野 早

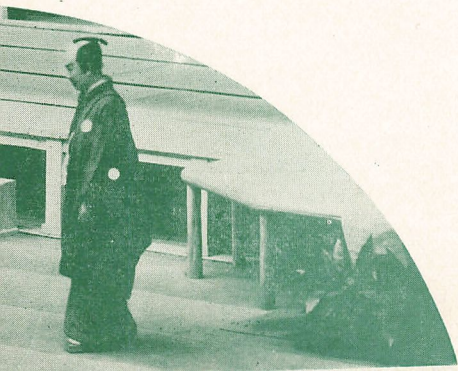
◇ 行 興 月 十 座 伎 舞 歌 ◇

大星由良助

松本幸四郎



茶 力 一 〓



◆ 畫の部 ◆

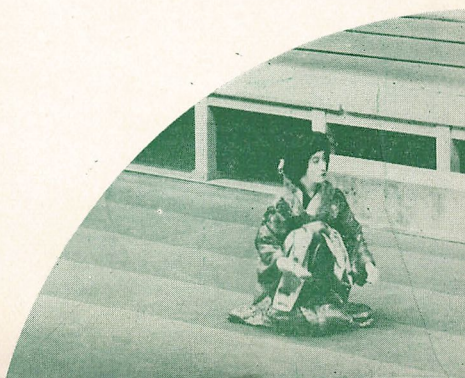
◆ 假名手本忠臣藏 ◆



遊
女
お
か
る

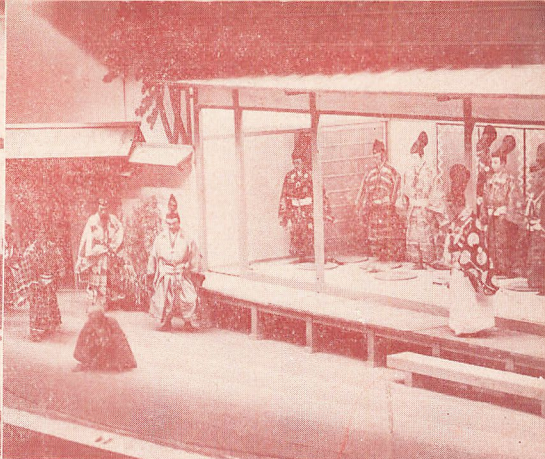
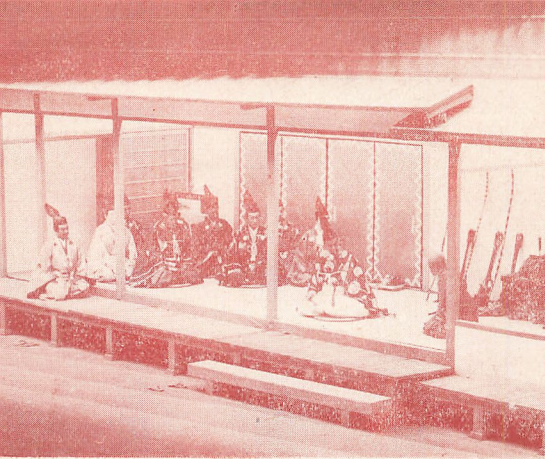
中
村
福
助

◇ 場 の 屋



大星 由良助
松本 幸四郎
遊女 おかる
中村 福助

十月の歌舞伎座



名和の館の場

十月の歌舞伎座

◇年長和名◇

↑曲

信濃坊源盛	成田堯心	名和長年	小條少時
市川右團次	中村魁車	松本幸四郎	中村鴈治郎

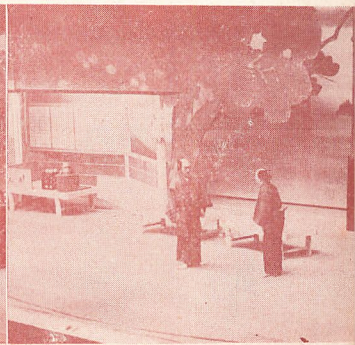
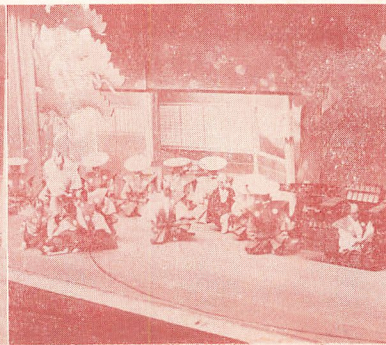
お澄 中村芳子



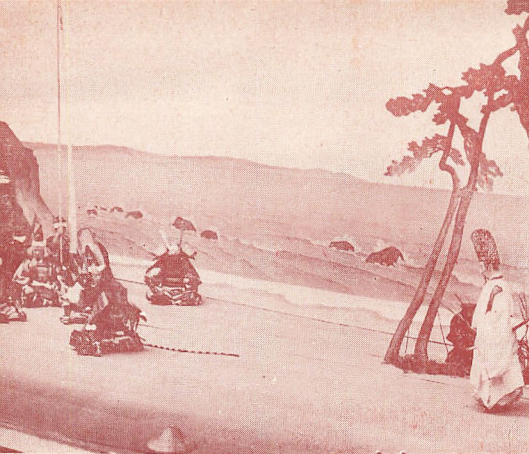
→

◇記昌繁島堂◇

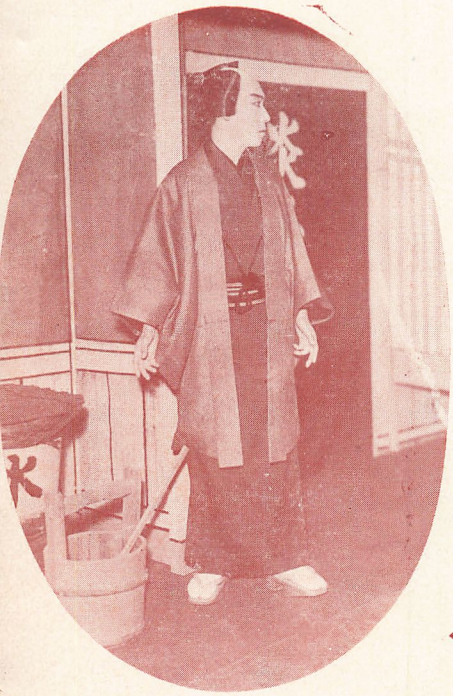
↓甲



前神明田神



大坂湊の場

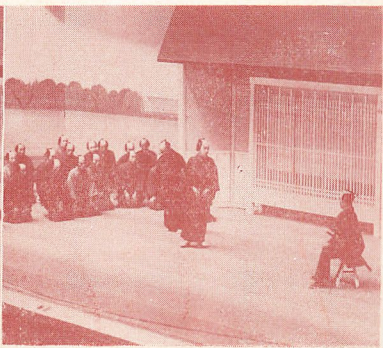
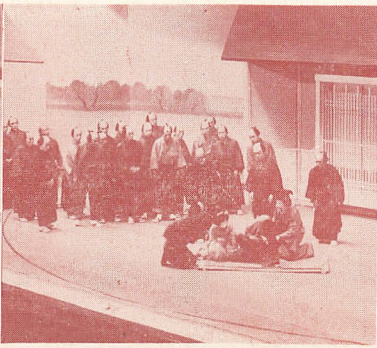


加島屋清兵衛
中村福助

◇ 年 長 和 名 ◇

土	加	前	娘	島	加
方	島	田		屋	島
作	屋	加	お	清	屋
林	女	賀	中	三	清
次	房	守	澄	郎	兵
郎	お	川	村	村	衛
長	町	市	芳	魁	福
三	吉	藏	子	車	助
郎	三				

◇ 記 昌 繁 島 堂 ◇



先 濱 の 島 堂

『釣』

女

◆ 部 の 夜 ◆



太 郎 澤 村 宗 十 郎	冠 者	大 名 市 川 右 團 次	某 林	醜 女 林 長 三 郎
---------------------------------	--------	---------------------------------	--------	----------------------------

十月の
歌舞伎座

アングロス并ス

ミルクチヨコレート

コーヒキヤラメル

チヨコレート

キヤラメル

チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地

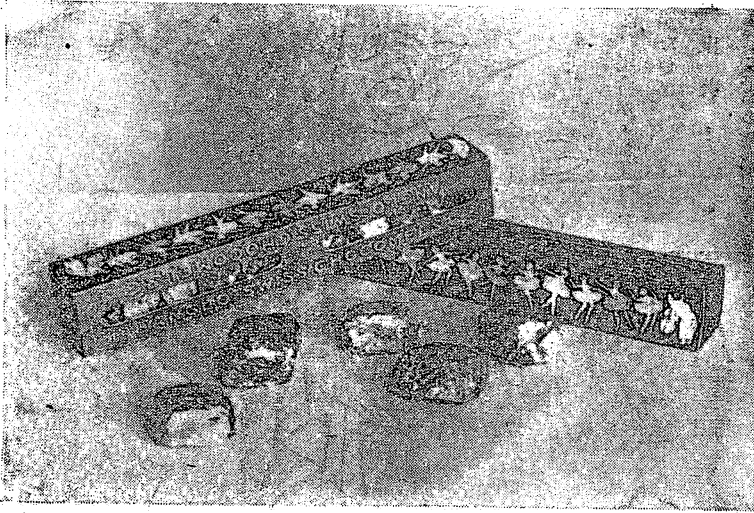
發賣元

株式會社

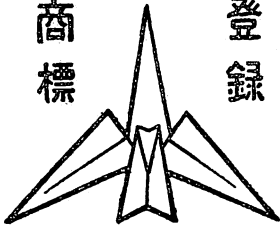
横山商店

電話東 (94)

四二一
六〇六
四一六
九三一
番



商標



登録

折鶴

ンテンラリフ

御實行下さい

チクとボマのてかてか頭はどうでせうね?

折鶴フリランチは巴里製に優る養毛香水・油です

爽やかなればりとふくよかな匂ひ

共に自然美! 健康美!

これこそ紳士淑女への最高の贈物!!

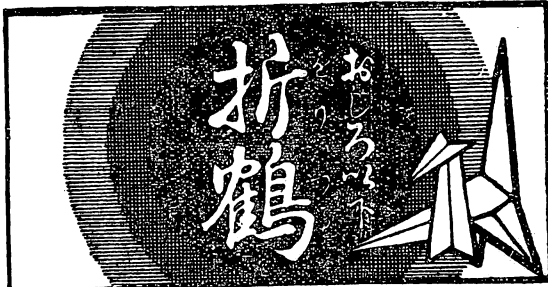


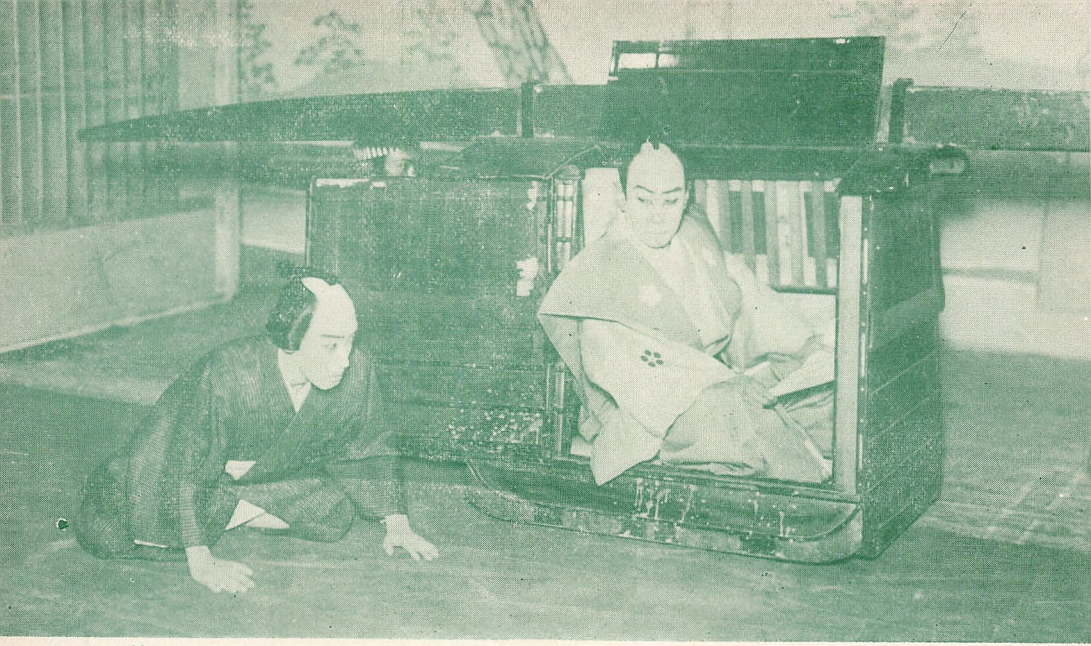
大阪 蜷橋

本舗

北

をぐらや





助 福 村 中 ・ 衛 兵 清 屋 島 加

藏 市 川 市 ・ 守 賀 加 田 前

「 記 昌 繁 島 堂 」

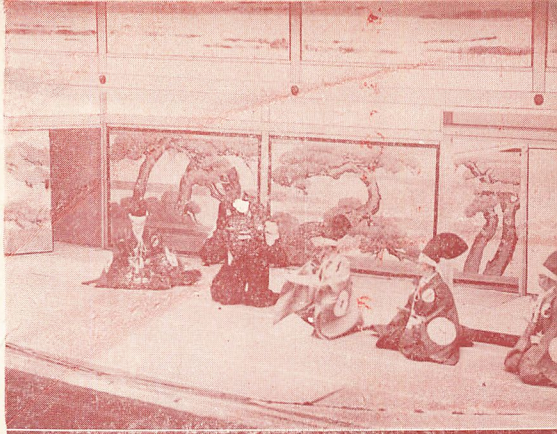
◇ 十 月 の 歌 舞 伎 座 ◇

土 方 作 次 郎
林 長 三 郎

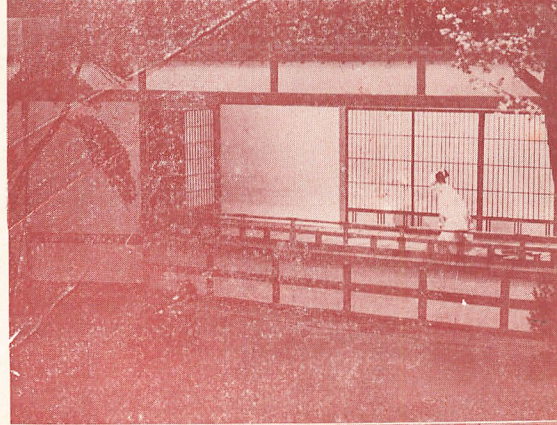


◇ 夜 の 部 ◇

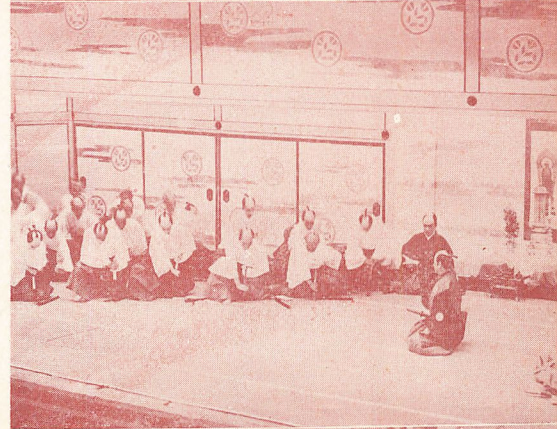
松の廊下



田村右京大夫邸



赤穂城中評定

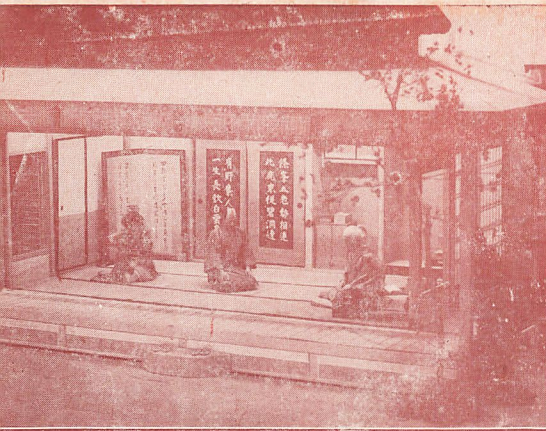


城明渡し



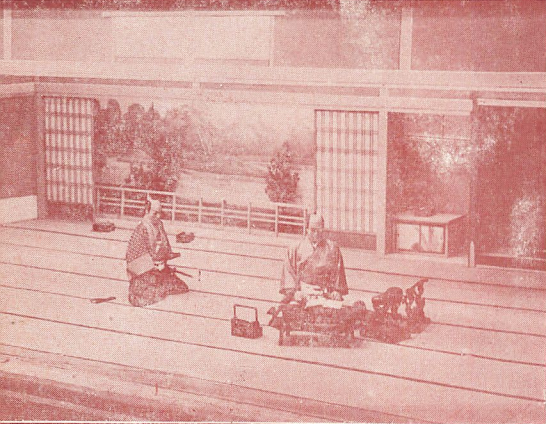
『元祿忠臣藏』

大石内藏之助	阪東壽三郎
浅野内匠頭長矩	中村扇雀
片岡源五衛門	中村霞仙
田村右京大夫	中村成太郎
堀部安兵衛	實川八百藏
脇坂淡路守	嵐橋三郎



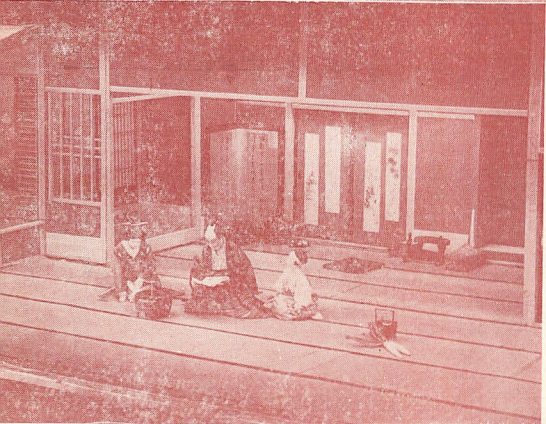
大 三 郎

千 壽
武 林 唯 七
矢 頭 右 衛 門 七
清 水 一 角
二 文 字 屋 お 輕
吉 田 澤 右 衛 門



三 島 本 陣 座 敷

淺 尾 奥 山
中 村 駒 之 助
阪 東 壽 之 助
市 川 玉 太 郎
實 川 延 太 郎
嵐 狂 藏



矢 來 町 大 竹 邸

◎ 京 都
南 座 十 月 興 行 ◎



仙 臺 茨 の 裏 門



誠 堀 小・介 了 岡 淺 郎 太 章 柳 花・吉 公 代 田 一 廣 原 藤・一 駿

◇ 江 り 濁 ◇

◇ 様 月 お ご 者 太 與 ◇

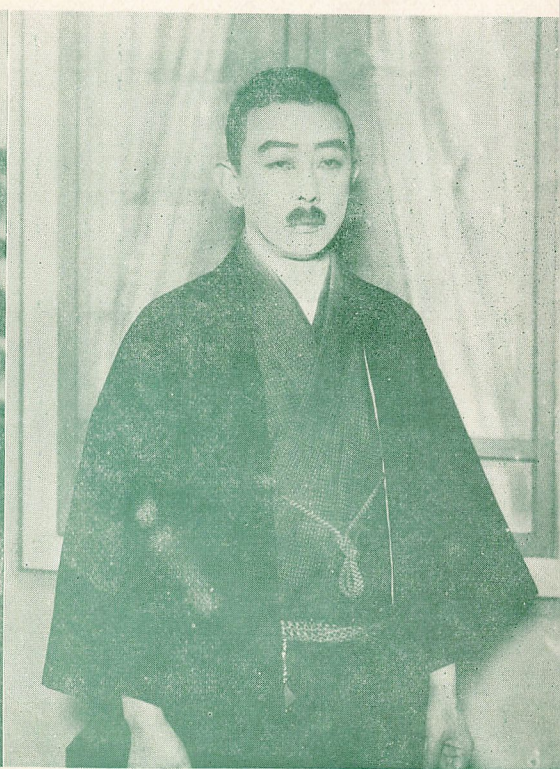
郎 綠 村 多 喜・七 源

雄 武 合 河・力 お 井 の 菊





郎 太 章 柳 花 ・ 子 砂 眞



昇 島 梅 ・ 策 俊 美 渥

◇ 日 の 城 落 山 城 ◇

◇ 仲 ぬ さ 生 編 後 ◇

郎 綠 村 多 喜 ・ 人 夫 州 南

郎 太 英 ・ 子 つ み 姪

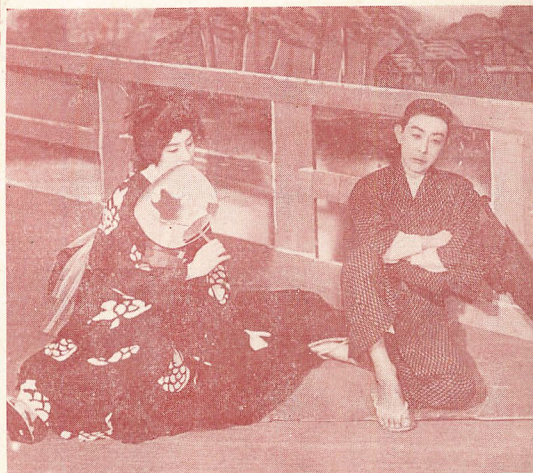


◇東京新派總動員◇

中座十月興行

『瀧の白糸』

水藝の太夫 瀧の白糸 花柳章太郎



瀧の白糸 花柳章太郎
 村越欣彌 梅島昇
 おまつ 英太郎
 鳶頭金太郎 小堀誠
 太夫元 大矢市次郎



高級玄米茶

変り番茶

著名百貨店・食料品店・茶舗にあり

粗悪模造品ありホウライ番茶と創製元に御注意

創製元

三

木園蓬

六

米堂

京都・寺町・四條北

茶名物

能登海標

変り

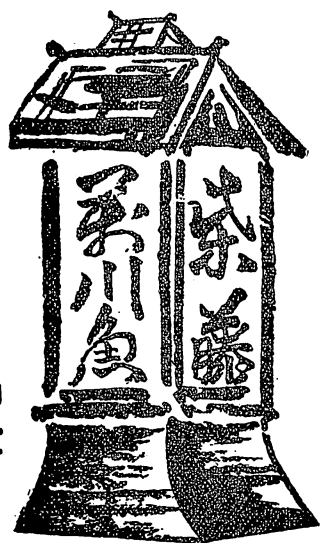
皆も今も
美味は変りません
当店の名物変り番茶
百貨店や他店でも
販売されて居りません

本堂の格別名茶
菊水堂本舗
京都府(四)二九八番
京都府(三)三三番

菊水堂本舗

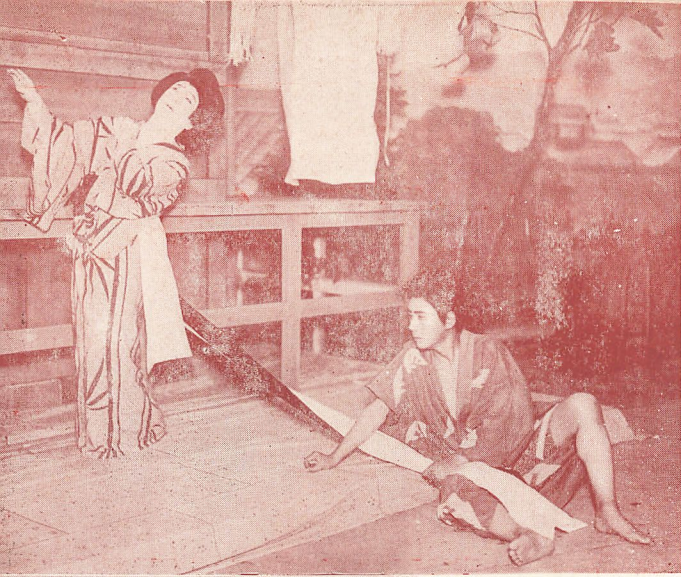
京都府(四)二九八番

豐 野 菜 魚 料 理



電話南 四八一〇
 九五二
 四八四四

柴藤食堂
 二階 椅子席
 三階 宴會場



『濁り江』

源七 喜多村 綠郎
お力 河合 武雄

げいしやお蝶 河合 武雄



『女浦島』



『後篇 生さぬ仲』

瀧川 訓導	太 郎	滋 郎	清 岡 珠 江	眞 砂 子	渥 美 俊 策
小 堀 誠	藤 間 廣	伊 東 薫	英 太 郎	花 柳 章 太 郎	梅 島 昇

◇東京新派劇重員◇中座十月興行◇



郎十長崎原河 助佐飛猿
『助佐飛猿』



郎太國崎原河 琴お 門衛右翫村中 吉郎次

『星れ流吉郎次』

郎十長崎原河 助武田桑

お
率
河原崎國太郎

◆前進座◆



浪花座

十月興行





衛右翫村中 道入海清好三



郎太國崎原河 秋 お

『助 佐 飛 猿』

◇ 座 浪 花 の 月 十 ◇

座 進 前

『星 流 吉 郎 次』

門 衛 右 翫 村 中 吉 郎 次
 郎 十 長 崎 原 河 助 武 田 桑 郎 太 國 崎 原 河 琴 お

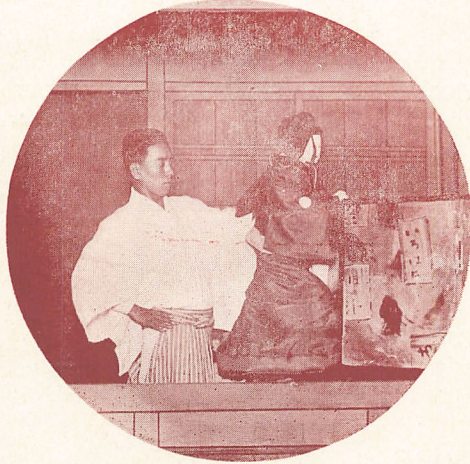


次 郎 吉
 中 村 翫 右 衛 門

文樂座人形淨瑠璃

「菅原傳授手習鑑」

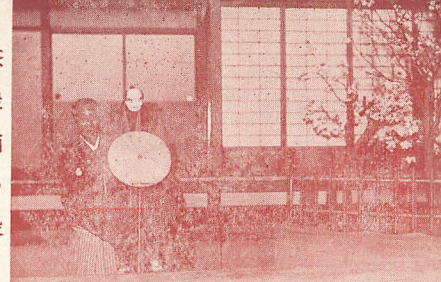
「來由木棟堂間三十三」



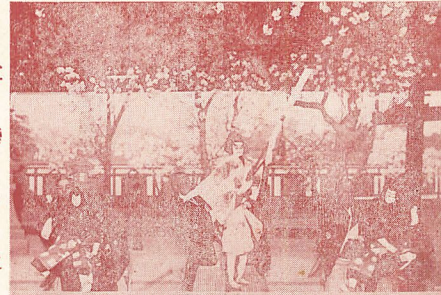
郎十紋竹桐 烏織娘

の	月	十
座	樂	文

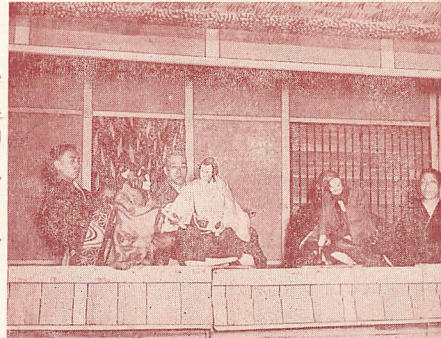
茶屋酒の段



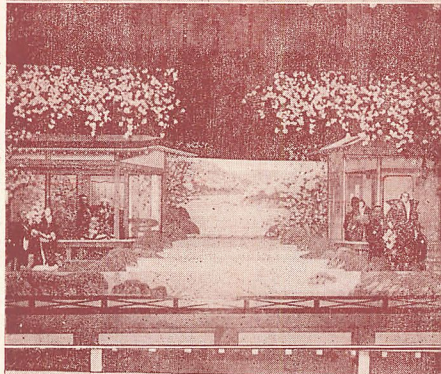
喧嘩の段



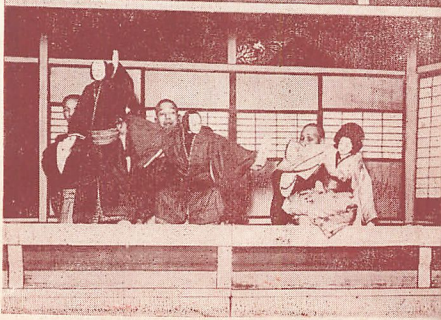
櫻丸切腹の段



妹背山婦女庭訓



心中紙屋治兵衛



茶

西區女字守時

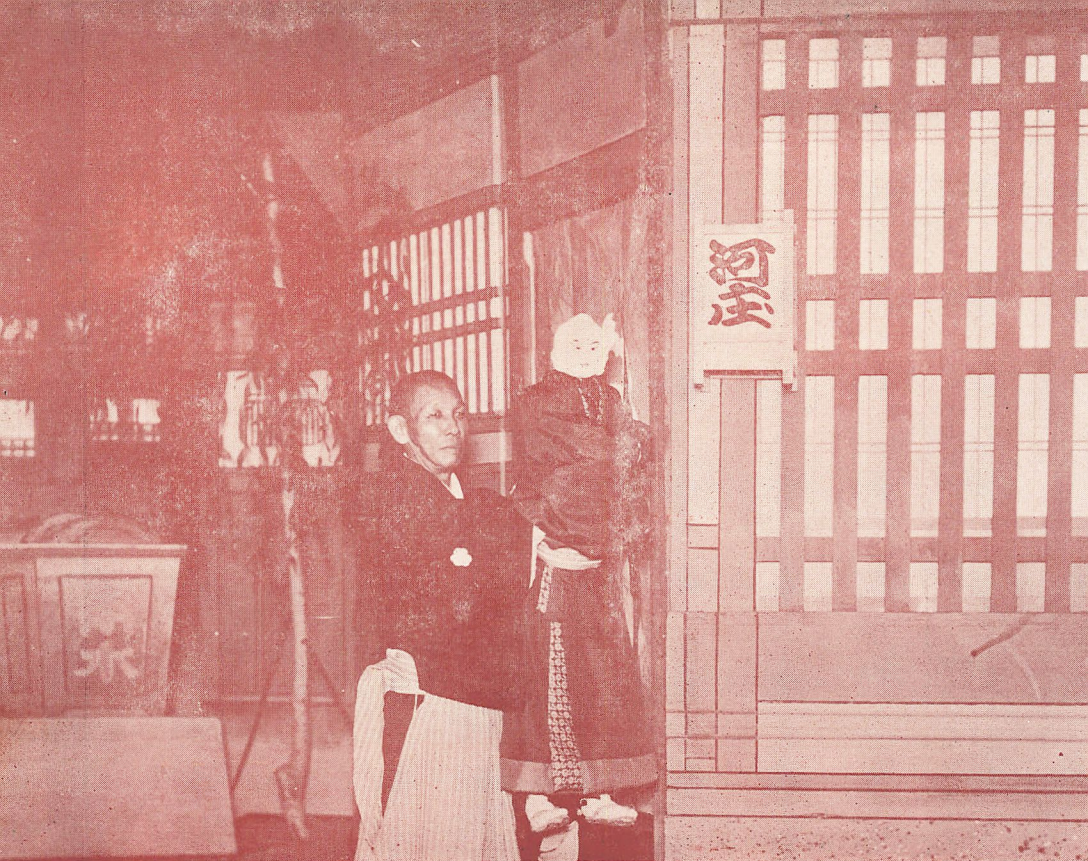
坐半

南區女字守時



命生本日

目丁四橋今區東市阪大



紙屋治兵衛・吉田榮三

◇ 心中紙屋治兵衛 ◇

(河庄の段)

天満に年経る。千早振。神にはあらぬ紙様と世のわに口に乗り。小春に深くあふぬさのくさり合たる御注連繩。今は結ぶの神無月堰かれ逢れの身と成果あわれ逢瀬の首尾あらば夫を二人が最期日と名残りの文の云かわし毎夜くの止かくご、抜魂てとぼくうかく身を焦す。煮賣屋で小春が沙汰。侍客で河床方と耳に入よりサア今宵と。覗く格子の奥の間に。客は頭巾の願の。動く斗に聲聞へす。可愛く小春が父火に背けた顔の。アノ瘦た事わいの。心の中は皆おれが事。爰に居ると吹込で連て飛なら梅田が北野エ、知らせたい味たいと心で招く氣は先へ身は空蟬の抜殻の格子に抱付あせり泣。奥には客が大欠び。思ひのある女郎衆のお伽でイヤモとんと氣がめめる。門も静な端の間へ出て行燈でも見て氣を晴さふサアござれと連立出れば三寶見付られじと身を忍び隠れて聞共内には知らず。なふ小春殿宵からのそぶり詞の端に氣を付くれば花車が咄しの紙治さやと心中する心と見たヤけ違ふまじ死神の付た耳へは意見も道理も入るまじこは思へども去こは愚痴のいたり先の男の無分別は恨ます一家一門そなたを恨み憎しみ萬人に死顔さらす。

◇ 文樂座十月興行 ◇



早川雪洲 グンオウ



伏見直江 アニオン

◇九月中旬よりの浪花座◇



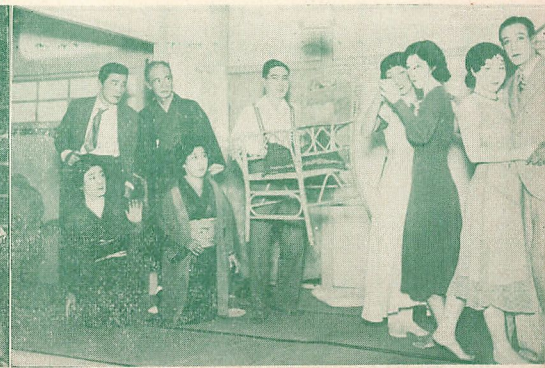
『グンオウれ晴天』

仙 造 嵐 橋三郎
娘 三重子 伏見直江

『裏街の灯』

「取討んわくた」

「求請代斯瓦」





館開日一月十
形人菊たからひ

面場十敷七流見
 紹精乃七七返改五十
 早傳原路行急申間期

科 梅 皮

藤 原 醫 院

電話 我 二六三六番

南區難波新地五番町
 戎橋電停前二ツ南社西入

ネオオタウリン

結核患者に殘されたる唯一の直
 接療法。結核菌に直接作用し積
 極的に之を撲滅する注射薬なり
 本劑の治癒期間は最も短く注射毎に菌
 は減少し早きは七八回にて無菌となり
 その症状は速かに輕快となる。將に
 斯の如きは他薬に其の類を見ず。特に
 結核薬中最高位を占む。(副作用絶無)

適應症(肺結核、肋膜炎、腹膜炎
 其他結核性諸疾患)

正一〇、〇〇〇六管入六〇〇
 價一五、〇〇〇六管入三〇〇

文獻
 送呈

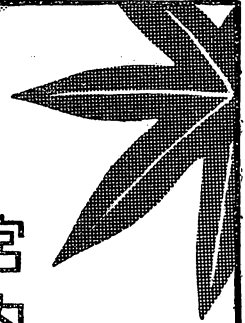
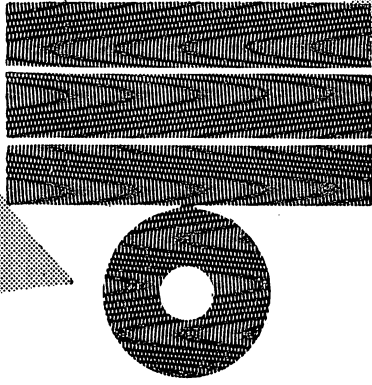
大阪市南區難波新地五番町四十二
 ネオオタウリン研究所

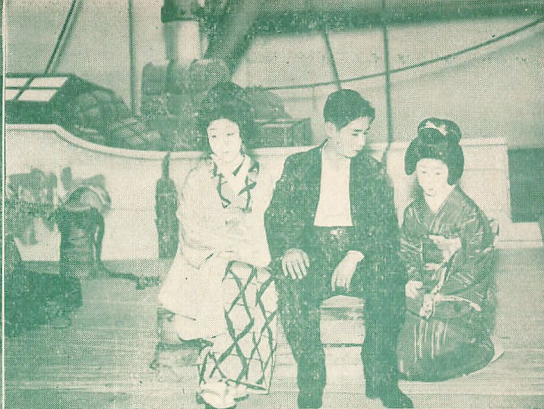
宮内省御用達

三ツカン酢

株式會社

中林酢店





【娘の島】

◇松竹家庭劇◇

前田眞三郎	松本甚藏	仙波長次郎	初太郎	鶴岡一郎	お小夜
高田 亘	元安 豊	小織桂一郎	石河 薫	山田 隆也	東 愛子

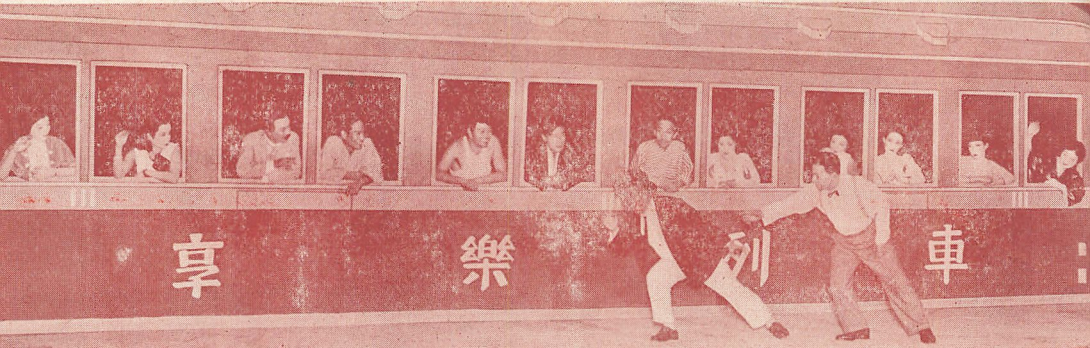
「砲鐵に夜闇」【上】
「皮のけ化」【下】

◇九月中旬よりの中座◇

「ミス非常時」

「角 笛」





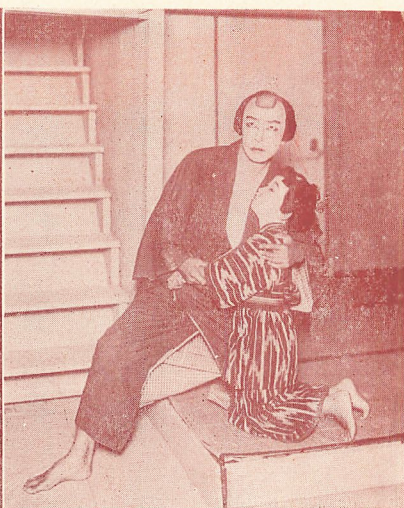
享 樂 列 車

新趣向の舞台挨拶と九里丸と中田

暗闇の市之丞と丑松
 作 丑太郎 山口俊雄
 丑松 谷川清

九月中旬の京都座

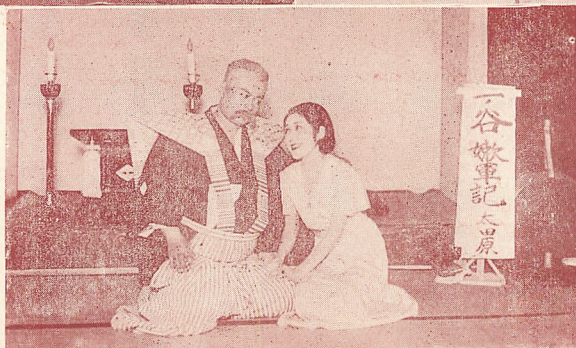
『ガラ政ごん』



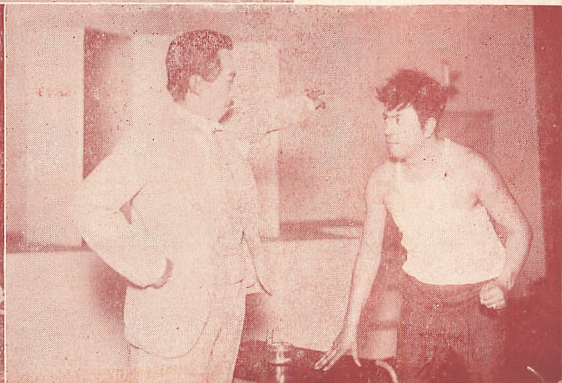
享 樂 列 車

『出臍の唄』

熊野 山口俊雄
 松本 金平軍之助
 鮎子 玉川みちみ
 ガラ政 中田正造



『脚舟い重』



紙粧化お

紙取脂ナキス



是非………
御愛用を
願ひます。

『川柳』

満員へ

特等席は

あぶらごり

姉妹品 スキナ石鹸

製 造 本 館

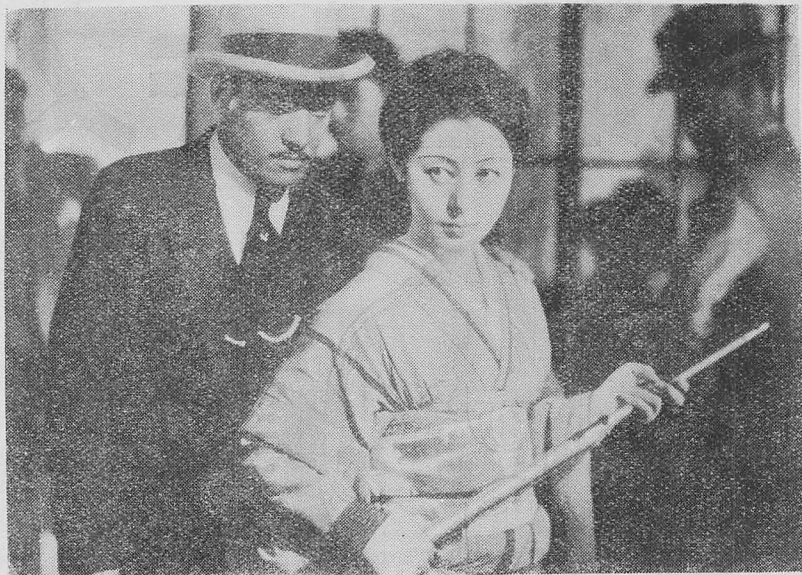
中 田 ナキス 屋
大 阪

發 賣 元

朝 日 堂 株 式 會 社

大 阪 南 久 寶 寺 四 町

本邦映畫界空前無敵の一大豪壯篇



青 春 街

新興
キネマ
超特作

大競演

中野英治・岡田時彦
入江か子・森田静子
鈴木木澄子・利由健次

◇現代理劇全部員出演◇

サンデー毎日三千圓懸賞一等當選秋季特號別所載

宮本幹也原作・・・田村實入社第一回監督作品

・・・竹井諒脚色・・・三木茂カメラ

愈々近日大公開

高雅で交通至便の
新住宅地推奨!!

住吉川住宅郷

【阪神国道灘中學前】

— 分讓開始 —

◀案内書進呈▶

御申込は

大林組住宅部

大阪天神橋(電東860)



小道具・小裂 貸衣裳

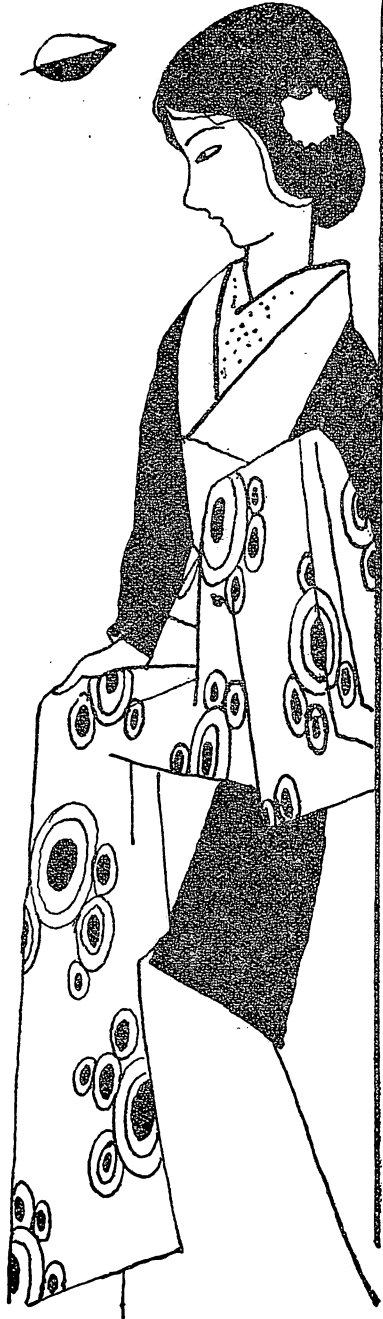
素人演藝會
宴會の催物
春秋温習會
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

本店
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五六三四番
淺草並木區十五
園電話 淺草 五五九九番

「其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、御來客の御相談に應じ便利よく取計ます」



月刊・演劇雑誌・新編

通類編

第八年

十月號

第十八五號



鷹治郎丈を鞭撻するぞ云ふこと

高安吸江

鷹治郎丈を鞭撻すといふ題で何か書けと云はれて私はそのあまりの意外さに仰天しました。「そんな無茶云ふたらドムならんがな」私の頭に浮んだ最初の句は此れです。一體皆はどう考へてゐるのでしやうか、果して同僚に鞭撻される程の餘地があると見えますか。

成程優のあの若々しい和やかな軽い動作、そしてそれが如何にも樂々と演ぜられてゐるのを見ると、誰しも優の精力の無限を信じたくなり、従つて種々と新しい要求をも出して良いと想像するでしやうが、實際その樂らしく見える裏面に優は血を吐かんばかりに苦しみ惱んでゐるのです。

とにかくあの老人——誰ですか、役者に年がないと云ふのは、私共はそんな空世辭はヌキにして卒直に申します。現今あの高齡であれ位壯者以上に活躍し得る俳優が凡天下にありませんか。かうした意味で優に向つて多大の敬意をはらつてゐるのは無論私ばかりではありますまい。それは優が常に人知れず苦心に苦心を重ねる不斷の努力の賜であつて、是は少しでも優に接してゐる人の普く知る處であります。現に今夕の河庄を語る會の席上での話でしたが、鷹治郎が紙治を演つた數は恐らく誰も知り得ない程の多數に上つてゐますが、優は其上演度毎にいつも異つた演出を試みてゐたのです。

かく最大の能率を發揮すべく渾身の力を消耗しつゝある此老活動家に向て、誰か若「まだふんばり方が足らぬ」と云ふたとすれば、其結果として非常な昂奮と憤激、それによる身神の過勞、ひいては其臟器諸機關の圓滑な生理的作業の拒絶といふ順序で、一言で云へば優の藝を殺すといふことになります。

それに此鷹治郎といふ人は云はゞ功成り名遂げた人です。尤もいかに名人にした處で場合によれば無論多少の不満な箇所がないとは云へず、全然缺點なしとは云ひ得ないものです。が、しかし今更それ等の末節を改めて行くにはあまりに完成し過ぎてをる優です。ヒヨツとすると角をためて牛を殺す愚を繰返すことにもなり得るかもしれせん。それで我々は優を既に出来上つた立派な標本藝術品として出来るだけ大事に保存し、悠々と皆よつて此れを觀賞すべきものであると思ひます。こうした意味で私は鞭撻どころではない、寧ろ今日まであまりに使ひ過ぎたことを惜しむのであります。

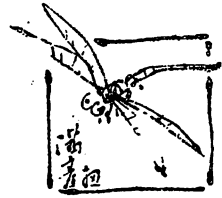
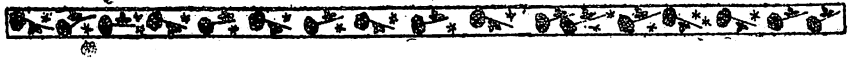
さてかく優自身が完成品として範を後世に示す一方後進の誘導といふことも亦考へねばならぬと思ひます。あれだけの技術を其儘誰にも傳へずに藏つておくのは斯道のためいかに

も惜しい、イヤ勿體ないことです。無論あの麗しい艶やかな持味そのものを全部やることも貰ふことも出来ないのは明ですが、能ふる限り此偉人に接近してその感化をうけ、多年の蘊蓄を聞いて己が蒙を啓くことが如何に有益であるかは申までもありません。

此點に於て優は此れまでから機會のある度に種々熱心に指導の勞を惜まなかつたと聞いてゐますが、私は更に進んでもつと再々若い人々と接觸する機會を造ることを勧めるのです。若手連は一切の障壁を取り去り、何等の蟠りもない、心から打解けた會合をしてそれへ優を招じあらゆる方面の質問を試みて教を乞ふと、優は胸襟をひらいて此等熱心な若い人々の希望にかなふやうに努める。こうして成立した老若、長幼の精神的一致結合が斯道の發達にいかん影響するかは今更喋々を要しませぬ。

一方優としても若者の氣持を理解する上に於て多大の便益を得るわけで、今回のやうに卅にならぬ勳平、二十八歳の紙治を演ずる潑刺たるその元氣、朗麗たるその若さの一原動力を此邊から求め得ないと誰が斷言し得られまじやう。

そこで私は鞭撻なる言葉を懲慚なる程度に緩和して此を名人鷹治郎文並に若手俳優諸氏に呈せんと思ふのであります。



天下一品の『河庄』

鴈治郎丈の至藝

富田泰彦

「生はたゞ一瞬にして、死もまた一瞬なり」——これはシルレルの詞だ。生活は活動である。生きとし生ける者は、一刻一刻と「生命」を消耗さして行かねばならない。「藝術」にも生命の流れがある。

X X

今度鴈治郎丈が、七年振りに演ずる「河庄」の紙屋治兵衛に就て語る私の負しい言葉も畢竟はこの前提の詞で盡きてゐると思ふ。

私は今となつて鴈治郎氏に對し、大阪日日新聞紙上に甚だ不用意な標題として、ク一世一代の意氣で、鴈治郎が天下一品の「河庄」を上演すくと付けたことの辯解をしようとは思はぬ。——何故か、一體總ての藝術家と云ふ者は常に一世一代の如き緊張した心持を持つて、この名作を後世に残さねばならないから、これは恰もすべての軍人は、常に

最後の御奉公と云つた所存の臍を固めて戰場に臨むがやうに——

鴈治郎氏の生命のあらん限りは、いつの日、幾度「紙治」を出さうとそれは勝手である。しかしこの好機と云ふものは、さう度々めぐり来るものではない。況してや觀衆を對象としての演技であり、興行者を通しての俳優である。恐らく今度歌舞伎座の一周年記念興行に上演されるとなつた「河庄」ほど意義深い機會は又と再び来ようか、否、絶対に來ない。寔に一世一代的に惠まれた「河庄」に接する我々好劇家に取つても、永久に記念すべき感激の舞臺であらねばならない。

「天滿に年經る千早振る神にはあらぬ紙神と世の鏝口に乗るばかり小春にふかく逢はぬさの……」の淨瑠璃から「毎夜」の死覺悟でぼつと揚幕から花道へ浮き出た伏目勝ちの頬冠り姿、一步一步に淨瑠璃のリズムに心からなる苦惱の表現「魂抜けてとぼくうか……」で例の脱げた雪駄の技巧、「チリガン」の三味線にトントん履いて了ふまでには既に千金の大歌舞伎、天下一品と誇るべき名優鴈治郎の生命である。「今、向ふの煮賣屋で顔は見えねど善六太兵衛高聲上げて小春が噂、侍客で河庄方」の名臺詞のうちの一舉一動——總てが型に嵌つて寸分の搖ぎさへ見せて、戯曲の生命が脈打つ名彫塑の如き姿態美、所謂鴈治郎の常春のやうな「若さ」がこゝに潑烈と煽情との渾然と相打つ火花を散らして、觀衆は宛然雷撃を受けたる心地に恍惚とされて了ふ。

畏友松阪青溪君も擧げてゐるが、寔に「頬冠りの中は日本一の顔」と穿つた岸本水府君の川柳が鴈治郎の「紙治」の全貌を評價し盡したと云つて可い。

私も嘗て鴈治郎の「紙治」讚仰の言葉として次のやうなことを云つてゐる、茲に抄録して今更の鴈治郎の「紙治」論もあるまいことを傳へたい。

×

×

鴈治郎の「紙治」には最早議論の餘地がない、是れを近代的に解釋して文學批評めいたとは云はしたくはない。

誰かゞ鴈治郎の舞臺を豊國に擬したやうだ。豊國も三代目は兎に角芳年、國周に末流を引いては、浮世繪のみではない舞臺の味もすがれて、歌舞伎の夢の美しさに浸るとが出来ない。

先代延若の味と、故宗十郎の技巧とに傳統をひいて、リアリズムな世界に完成されたのが鴈治郎の「紙治」藝術である。完成は究極である。是れ以上に一指でも加へれば忽ち型が崩壊されて終ふ。斯くて鴈治郎の紙治は最後のものとして此儘にのこさるべきものである。要するに是れを器物で云へば國寶である。建築ならば、さしずめ保護建造物と云ふ制札の立つべきものである。

×

×

兎に角、私は今も斯うした見解を持つてゐる。だが器物や建築にすら生命がある。況してや人間鴈治郎の演技は、一瞬の幻影さへ残さず消えて終ふ。

大正十四年六月中座で見た鴈治郎の「紙治」は、昭和八年十月歌舞伎座の舞臺に再現することは出来ない。況んや十年後に猶鴈治郎氏が、生きてありとも、この紙治の上演することの不可能であることは、敢て説明を加へるまでもあるまい。

然らば將來鴈治郎氏を措いてこの「紙治」を彼ほどに演出する者があるか、私はキツパリ云ふ「断じてなし」!!と斯くて大近松の代表作「天の網島」を懐ふ時、既に名品「紙治」は永久に舞臺から消えて了ふてゐるだらう——この意味からでも、今度の一世一代と云ふ鴈治郎氏の「河庄」を天下を擧げて珍重讃仰すべきである。(終)

新忠臣蔵に就いて

食 満 南 北

京都でやる壽三郎、扇雀一座の「忠臣蔵」は、この前、廣島をふり出しに地方巡業の時、私がトーカーの台本から、さうして在來のいろ／＼の「義士劇」からひろひあつめたものですが、今度は病中のことであり、何としても訂正の必要もあるので、一切を大森痴雪氏にお願ひしたわけなのですが……つまり病人に何のお話もないわけですが。

面白い因縁話をして見ませう。

この興行の爲、私は廣島へ行つたのです。初日に壽之助君の矢頭右衛門七が、池の中へ落ちる時脚を打つたのです。さうして樂屋で寝てゐたのを親しく見たのですが、私はさして氣にもとめなかつたのですが。芝居から宿へ歸らうとした橋の上で私は右の脚がグゼツて痛かつたのを引すり／＼歸つたのでした。この興行は非常に客足のついたのも妙な因縁ぢやありませんか？ 處が私は舊來あしやの里で脚本家が脚を痛めてしまつたのです。

何だつてこんなに脚の因縁がつづくのでせうか？

恐らくトーカーの忠臣蔵は衣笠貞之助氏のカントクで、それを脚色したのですから私はアシタントかもしれません。

忠臣藏拾遺

西尾福三郎

×五・一五事件の斷罪是非說の中へ赤穂浪士の問題がしきりに引例されて世間の注意を惹いてゐる。

五・一五だとか、四・一六だとか妙な呼び方が流行り出した物だ。これでは後世史家が困らう。否史家だけぢやない、歴史を習ふ者にとつて面倒な暗記材料が増へて頭痛の種だ。

さしづめ二二・一四事件と云へば忠臣藏の事になる。そんなら五・二八事件は？と問はれたら一寸即座に答へられない。十八年の天津風會我兄弟のあの目です。この五・二八事件をこのまゝの題目で掲げた誰かの大家小説があつたのを思ひ出す。所でもう一つ十一・七事件を知つてゐますかと尋ねられたら、恐らく即答できる人は少なからう。三大仇討の一つ荒木又右衛門事件のことだ。

こんな無趣味な記録法は早く改めて欲しいものだ。

×

時將に非常時とあつて國粹劇のオンパレード、楠公劇の大當りに引續いて今月は名和長年と忠臣藏、而も忠臣藏は京阪同時に妍を競つて老手と若手の腕争ひ、筆者も茲兩三年引續いて本誌に忠臣藏の記事書かぬ年無く、即ち昭和五年十二月、六年二月、七年三月、と今回で併せて四年に四回、成程これだけくり返し演ぜられて猶かつ飽きも嫌かれもせぬ所、遺が國粹忠臣藏と云はれるだけの事はあると申すもの。

×

所で今度は一寸趣を更へて、餘り世に知られてゐない忠臣藏の遺蹟を尋ねてみやう。

勘平さんは三十になるやならず死ぬるのは……

とお輕に嘆かせた戀望の早野勘平、實は菅野三平、この人の故郷は山崎ならぬ攝津の豊能郡菅野村にあつて當時の建物もそのまゝに残り墓標は勿論、切腹に使つた刀も保存されてゐる。この人は芝居するやうにお輕の夫でもなければ、無論過つて人殺しをした爲に腹をきつて死ぬるのではない。

當時二十三歳の三平にはまだ定まる妻もなく浪人とは云へ名ある郷士の倅として父は縁談を進めて止まない。亡君一週忌迄に復讐を遂げる最初の豫定として連判の同志は續々として東行し、三平にも發足の内命がきてゐる父の命に従つて家に止り妻を迎へれば同志を裏切り君恩を忘却した事になり、と云つて、一方大事を秘して東行義盟に加はれば不孝の名を如何にせん。親と雖も一語も漏せぬ一大事だけに孝ならんとすれば忠ならず、忠ならんとすれば孝ならず、このデレムマに陥つて遂に正月十四日自刃して果てたと云ふのが真相で、芝居ならずともこの一條は十二分の悲劇である。

選文としてみる蟻蝶の賦一篇、悶々の鬱屈を慕に托して述べたる吐血の好文である。「芒の穂を氣の劍なり野路の露」と云ふ氣格の強い句を残してゐる。

お輕は當時十八歳、三平(勘平)とは何の關係もない事は前

に述べた。無論祇園町の遊女でもない。

恰度三平が自刃しに元祿十五年正月、伏見にゐた小山源五左衛門(良雄の伯父)の世語で、當時裏寺町梅林庵(今の新京極花旅小路)にゐた大石の側女に上つた。逆算してみると、大石夫人はこの頃三男大三郎を妊娠中で四五ヶ月の身重で但馬の實家へ戻つてゐる。

以來十ヶ月大石はお輕と起居を共にして、秋十月の七日拂曉京を出發、東下りの途についた。

それを見送つたお輕は、「後急に壽命を縮む」とあるから、多分別離を僂んで自殺したのであらう。お輕の實家は二文字屋次郎左衛門と云つて、寺町二條に家があつた。二文字屋の子孫は今大阪市東成區粉濱町東之町四ノ一〇〇扇田秀信氏がそれである。同氏の母堂故みかさんが生前京都の上善寺住職に語つた話によると、お輕は今の五番町遊廓の近く一番町で生れた人である。みかさんが嫁入當時にはまだ同所にその家が残つてゐたとの事である。これで見ると、一番町に家があり、二條の方は店でもあつたのか。ともかくお輕の墓は鞍馬口の地藏さんで名高い上善寺にあつて「清譽貞林法尼」と云ふのがその戒名である。

大石内藏之助が赤穂退散後、山科へ落着く迄、及びその少年

時代江州大石村に住んでゐた事がある。現に大石村の縣社佐久奈度神社には良雄の名で奉納した繪馬が残つてゐる。同村東村の大石久右衛門と云ふのが良雄の宗家であつて、良雄の假名池田久右衛門と云ふのも之によつたものである。

大石村は江州の東端に位し、その隣りがすぐ山城宇治川原、茲の上田道欣と云ふのへ良雄の曾祖父の叔母が嫁いで居り、又良雄の伯父小山氏の一族も茲に居た。そして曾祖父のゐた八幡の宮本坊には前記上田氏から出た貞隆阿闍梨が住職し、同じ山内の大西坊には良雄の弟専貞が住職してゐた。

この宇治川原が筆者の生地で、上田氏と筆者とは満更らの他人でもないのだが、同家に赤穂實祿と題する三册十五卷の寫本が残つてゐる。大石縁家の忠臣藏記録として珍重すべきものだと思つてゐる。さうした關係で良雄少年時代大石村にゐた時分に茲まで遊びにきた事があつたらしく、上田氏近邊の眞言院で勉強したと云ふ話を古老から聞いた事がある。尤も良雄の生れは赤穂だから、大石村に居たのはさう長い間では無からかうと思ふ。現に大石村には宗家の子孫奥太郎氏がゐて、系圖や遺品を擁して物堅く暮してゐる。附近の三四ヶ寺は何れも大石有縁の寺で、義士の位牌や墓地その他の參考資料を相當持つてゐる。附近の田上村は間親子三人の生地であり、近松勘六も生れはこ

の近邊である。更らに奥田孫大夫が田原の出身とか云ふので調べかけたが、この點は未だはつきりしない、何れにしても江州大石村近邊は義士史蹟として注意に値する所である。

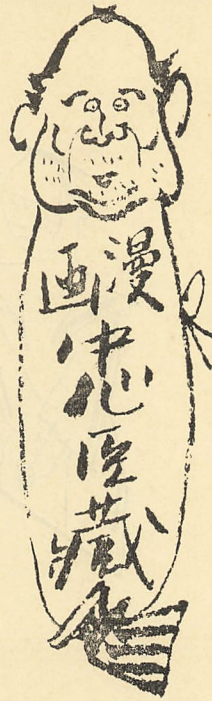
——終——

御愛藏の書畫幅や
書籍箱等に二三袋つゝお入
れになれば虫害の虞はござ
いませぬ

鳩 防蟲香

四十圓 内地 拾四錢
五十圓入 貳圓 送料 拾錢

京都市寺町小路角
鳩居堂
振替大阪六三八

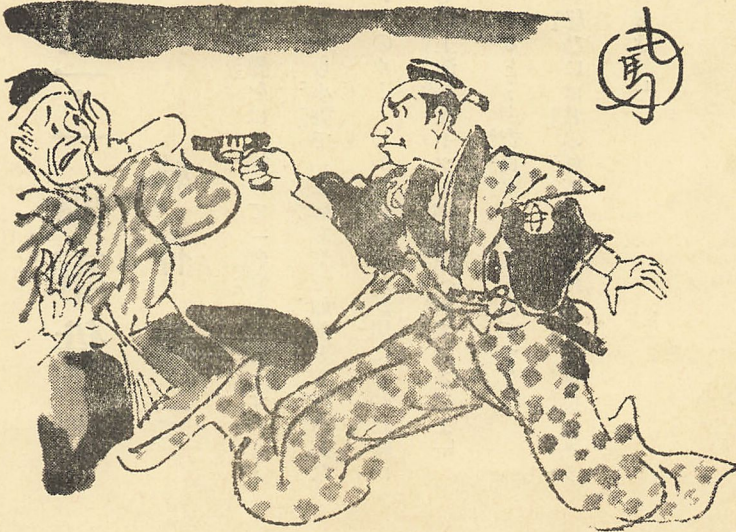


『松の廊下師直』

狙撃事件』

酒井 七馬

堪へざる侮辱を加へられた鹽谷氏は突如アローニング銃を取出すや師直の胸元へ……あゝしかしウカツにも其の銃には弾丸がこめて無かつたばかりに遂に五萬三千石が玉なし……。





三・一四事件

妹 脊 平 三

検事聲をけんじこゑはり揚あげて「判官を死罪とす」――

それから小聲で「法律ぢやで如何とも仕方しかたがな

いでいのウ……しかし君の事が芝居しばゐになつた時は

その上演料げんれうはキツト御内室ごないしつへ届とどてやるぞよ」

「すると……吉良はどうなるんです？」

「終しまひには君の部下かにやられるよ！吉良はキラ

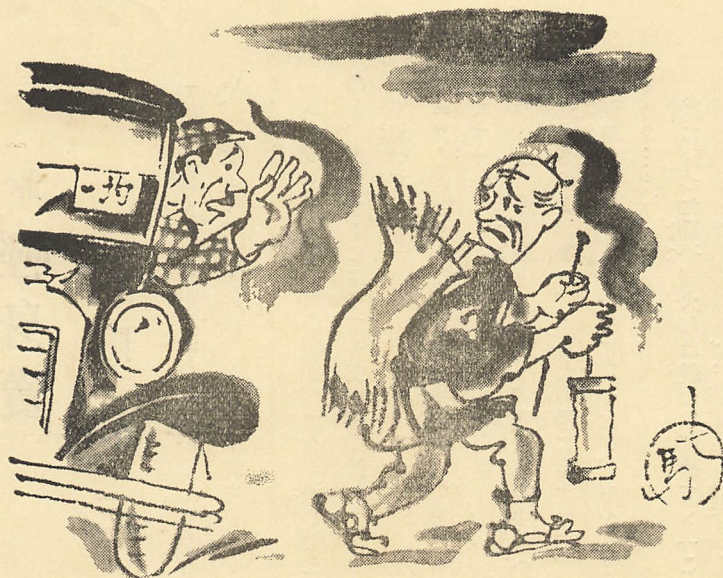
れるよ！」

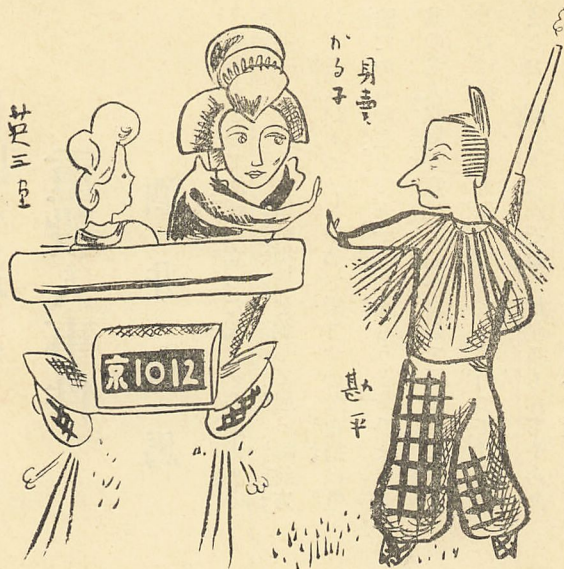
「山崎街道二」

重殺人事件」

酒井七馬

参考人として法廷に立つた圓タクの運転手の
 陳述「ハイ、丁度山崎街道を流して居る時前方
 から老人がトボくやつて來ますので夜道は危
 険だからお宅まで五十錢で送らうと云ひますと
 其の老人餘程堅意地と見へまして三十錢に負け
 なければ乗らないと云つてすたこら行つてしまひ
 ました、圓タクなんぞ餘り値切るもんぢやあり
 ませんや……」裁判長「コラ!!! 餘計な事は控へ
 ……ツ」





『お軽身賣』

富田英三

「かごで行くのはおかるぢやないか……ぢやない、タクシーで行くのは、かる子さんぢやないか？」

「シヤレどころぢやないのよ、アタシ決心したのよ、ダンサーになつて一文字屋で働かう……つて思つてんの」

「エッ！ダンサーに……では共稼ぎして呉れるんですネ」

「ウ、ン、今日限り、アタシ、獨身享樂主義へ轉向するのよ。第一、あんたの様にニヤケた、生活能力のない人がいやになつたの、ぢや、サイナラ……」

後に残つた勘平、火なは銃をなげ捨て、この俺は、この俺は、何て意気地のない男なんだ……」

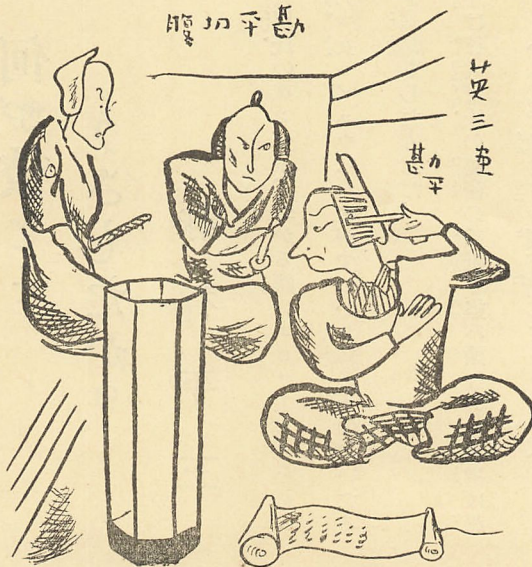
勘平切腹

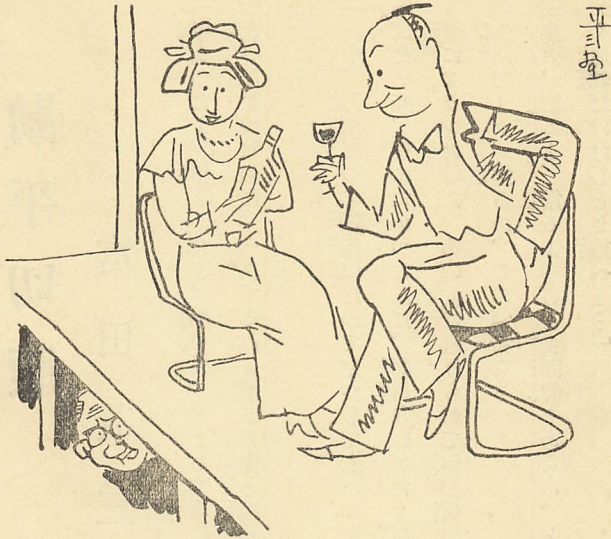
富田英三

「早まつたよ、早まつたよ、勘平君、どうしてあの傷を調べなかつたのだ、一目でそれと解る刀傷と鐵砲傷だのに……」

「いや、刀傷だつて鐵砲傷だつてどつちでもいゝんだ俺はたゞ死、死にたかつたんだ。面目ないがたゞ今かる子にフラレたのだ、あの女に逃げられて何が爲のこの生活だ！ナ、解るか、この氣持ち？」

「ウン、解るよ、解るよ、けど世間體もあらあ、とにかく血判だけはしとき給へ……」





何が彼をそ

うさしたか？

妹脊平三

おほし
大星氏のタンデキ、おかる嬢のエロサービスをそれに
りまっせ
一カ少女レビューウなどがすつかり縁の下えんしたの老いたる
かれ
彼を昂奮きゆうげんさせたもんだ。

いま
今は彼大星おほし氏の秘密ひみつの手紙てがみを盗み読みぬすみよみするナンテ事ことは愚ぐ
だ！といふんで縁えんの下したを飛び出としてシマバラヘ！

彼女も歩めば街も明るい

モシツクな濃肌色

ク ラ ブ 白 粉

秋はつらつとクラブの粧ひ……





中座十月狂言

新派鸚鵡石 (俳句)

小山紅露

◎『與太者とお月様』

堀外の場

公吉 花柳章太郎

了介 小堀誠

駿一 藤間廣一

了介「誰も来ないか。」

駿一「うん。」

公吉「坊や誰も、なんにも見えないかい。」

駿一「誰も見てないよ、お月様だけ見てゐるよ。」

清淨ご月に氣澄める桔梗かな



◎『濁り江』 大寺横手の場

源 七 喜多村 綠郎

お 力 河合 武雄

お力「刃物を見ない中なら逃げもしたらうが、刃物を忍ばせて
るたお前の心に愛憎が盡きた、駈落は眞つ平ですよ。

源七「では此の刃物に物を思はせ、俺ゆへには惜しまない命、
綺麗に此處で俺にくれ、俺も役から直ぐに行く。

お力「厭々、そんな卑怯者に遣る命はない心中など、後の浮名
を誂はれるのは七里ケツバイお斷りします。源さん、もう
今夜ぎりですよ。

捨られぬ戀捨てる身も長夜哉

雁啼くや別れたくなるあの仕打



◎ 後篇 『生さぬ仲』 俊策宅の場

俊策 梅島昇

真砂子 花柳章太郎

俊策「貴様は太郎を呪ふのか。」

真砂子「呪ひます。あんな子さへ居なかつたら。」

俊策「馬鹿、太郎は己れの大切な子だ、あの子は己れの手で育てる。呪へ、呪へ、それ程滋が可愛いなら滋を連れて、何處へでも行け。」

真砂子「エ、参ります。」

萩桔梗いづれ當らぬ露けさに

◎ 『城山落城の日』

糸子 喜多村緑郎

糸子「聞くな、見るなと、固く父、伯父の言ひ付を受けながら





その訓言を守りかねて、戦に心奪はるやうな者は、お聞きなされてもお悦びはなさるまい。お父様か伯父様のお赦しが出るまでは決してその木は降りられませぬ、わたしもこゝで座つてゐる、お前達も木の上に、飽くまで戦争を……
…見物なさるがいゝ。

誰が魂か宿れる芙蓉凜こして

◎『女浦島』ある待合の場

藝者お蝶

河合 武雄

「こんな御時節が何だい、藝者は藝の女だよ、富本蘭八とは云はないが清元、長唄、常盤津、歌澤、義太夫それに踊りとこれだけの表藝の中の何かで立派に立つて行かれるものを、どうして當世に阿諛やらなきやならないんだい。やつと、お濠ひへ出るだけで藝者で候とは餘り臆面がなさすぎるね。

新道の名も今はなし秋簾



◎『瀧の白糸』卯辰橋の場

欣 彌 梅 島 昇
白 糸 花 柳 章 太 郎

白糸「お前さんは餘程情なしたよ、自分の抱いた女を忘れるなんて事があるもんかね。

欣彌「抱いた？、私か？

白糸「あゝ、お前さんに抱かれたのさ。

欣彌「何處で？

白糸「いゝとこで……………」

欣彌「いゝ處で？……抱いた記憶はないが、成程何處かで見つ
やうだ。

雁啼くやあの人ならば立てすこす



てい 就に記昌繁島堂

子代嘉村大

「サンデー毎日」の紙上で上演脚本の募集廣告を見たのが昨年の三月十三日。一切は五月三十一日なので、これは書くとするれば、かなり書く時間もあると思つて居ましたが、開場式とか、大阪中心の舞台とかいふ條件がついて居るので、材料が狭くて面倒だと思つて見過してしました。ところが四月になつて私も書いて見たいと思ふやうになつて、筋をたて四月二十五日に起稿して同廿七日に脱稿しました。

前々から所謂、米將軍——八代將軍吉宗——に就いては調べてみましたので、書いて見たいと思ひましたが、これは世界が主として江戸になりますし、一幕には盛りこめませんので、その一部の堂島に於ける帳合米許可の件だけを書きましたのですが、泣いたり憤慨したりする人だけの芝居で、スケールが大きく壯麗であり華麗であることを要する開場式の一番外といふ條件には、相距ること甚だ遠い作であります。

さうした缺點の多い作で、殊に一年半近く経た今日、今更何も申す事はありませんが、書いてゐた當時は米市場を取りあつかふといふ點に興味をもつて書きました。従來の舊劇に米市場は取りあつかはれて居ないと思ひます。魚市場ですと、時雨傘等にもつかはれてゐますが、米市場は曾てないと思ひます。それで米市場、しかも當初の野天の米市場を舞台にのせる事について、かなり興味を以て筆を執りました。——或は興味に墮しすぎたかもしれませぬ。——けれどそれは所詮一種の獵奇であつて、内容に於いて何のたそくにもなりはしません。総りに想をかまへるについて参考にした主なる書名を記しておきます。

米價干渉事略 米穀賣買出世車 大阪堂島米市場發端の事 大岡越前守(臼井喜代松氏述)
攝津名所圖會 攝津落穂集 濱方記録(近世社會經濟叢書第一卷) 八木のはなし

由良之助の遊蕩振り

倉田啓明

浮大盡こと大星由良之助の由良さんが祇園の一方でお軽にうつつを抜かして豪遊したのも、敵を欺く苦肉の策、さればにや間諜はこれを眞意と思ひ込んで、蛸肴を喰はせたり、青痰吐きかけて足蹴にしたりして、うつけ者よ腰抜武士よと罵つて、ひそかに會心の北叟笑を洩らしたとあるのは、古來神史野乘の義士傳の常套手法、芝居の方でもお馴染の脚色手段だがわれ等は由良さんがこんなあざとい計略を用ひてまで、敵を欺かねばなら

なかつたとはどうも考へられない。だからやはり由良さんは名に負ふ元祿太平の御代の遊蕩兒、大望を前にしても情痴の夢に浸るだけの心の餘裕があつたものと解釋した方が、適かに彼の人物も大きくならうといふもの。またかくありしに相違なしと信ずるのだ。まして吉良上杉の兩家が細作を放つて、赤穂浪士の行動を探らせたといふ説に就ても、一應疑問を挟むべき餘地があるのだが、この話は別として赤穂義士の人氣を千載の後の世ま

で囂り立てたのは、竹田出雲と太宰春台二人が大いに與つて力ありといふべきで前者は寛延元年八月十四日竹本座の舞台で初日を出した「假名手本忠臣藏」後者は古學派の儒者にして、義士の助命説を排して敢然切腹説を主張した功績。全く義士に死を賜はつたのは彼等の芳名を竹帛に垂れるに至つた最大原因で、萬一助命しようものなら墮落沈湮して却て汚名を貽すが如き不所存者もゐたであらう。殷鑑遠からず明治元年塚妙國寺で切腹し

た土佐の烈士の内助命せられたものに、忠臣烈士と讃賞されるのでいゝ氣になつて無賴の徒となり、郷黨の擯斥を受け終て完うしなかつたものもあつたさうだ。

さて由良さん——いや大石内藏助良雄が豪遊したのは祇園の一方でないことは近頃誰でも知つてゐる實は伏見の撞木町こゝは寛永八年刊行の「傾城禁短氣」にも「されば近年伏見の撞木町繁昌仕出しも、十八匁より上の位なければ、随分奮てからが高の知れたる事と太夫を買ふ心をもつて見ては氣のはらぬよい遊び所」とあるとほり、慶長九年十二月の再興以來太夫といふ最高の妓品のない廓、天神さへ寛文元年に二人、六年には零、圍は萬治三年四月からこの地のピンとなつてゐる、大石等は笹屋清右衛門方で遊んだものだ。例の「里氣色」といふ端唄もこゝで作つたのだ。笹屋は撞木町でも第一

の大家だつたことは橘南翁の「北窓瑣談」にも出てゐるけれども、大石の遊びは豪遊といふほどのものではなく、第三流の妓品を買つて喜んでゐたのである。當時太夫は七十六匁で金一兩二分、天神が三十匁で金二分、鹿懸は十八匁で金一分と錢百五十文といふのが相場だつた。

さればにや西鶴の「好色一代男」にも「島原の着おろし、あやめ八丈唐織の故着も此里におくりてよき事に似せける」とあつて、撞木町の妓の盛粧は島原のお古であつたといふから、大抵知れてゐるではないか。

ところで大石の買ひ馴染の妓は何といふ女かと詮索してみると「義士傳一夕話」には「浮橋」といひ、橘南翁は「夕霧」と言つてゐる。元禄十五年板行の「遊里槽太鼓」を調査するとなるほど撞木町名寄に、「夕霧」もあれば「浮橋」もゐる。

一文字や内

夕霧、花崎、しら藤、浮橋、今坂、よし野、花川、中川、今川、大崎、かほる、八鹽
いづれも一文字屋の抱女で、大石は元禄十四年七月から翌年十月までの山科閑居の間に揚屋の笹屋清右衛門方へ通つて買ひ馴染んだのだ。

もつとも大石は撞木町ばかりか、島原にも通つたことは「義士傳一夕話」にある。しかもその狎妓は「浮舟」とある。浮舟といふのは「色三味線」の島原名寄によると、

上ノ町さきやう屋八右衛門内
太夫 さんご、こてう
天神 やくも、山の井、はんちよ、やへぎり、そのはし、かくやま、うきふね、よしさか
鹿懸 くもゐ、こてう、いわき、やつはし、すま
この「浮舟」だとすると妓品は天神だ

千五百石の家老位では、なかく太夫は買へないことがこれでも判明する。撞木町には太夫はゐらないから是非もない次第だが、當時の島原には十三人も太夫がゐた。それを買ふ位でなければ敵の間者を欺くことは能きならうに——要は經濟關係からにちがひない。それを撞木町では「浮橋」、島原では「浮舟」二つながら「うき」がつくので、世に呼んで浮大盡は少々可笑しい。太夫を買はないお大盡さまなんかある筈がない。換言すれば大石のやうに千五百石の収入では、天神を買ふのも容易の業ではなかつたので、その證據として「好色一代女」の一節がこの間の消息をよく傳へてゐる。

「物別、傾城買その分際より仕過す物なり、銀五百貫目より上のふりまはしの人、太夫にもあふべし、二百貫目までの人、天職苦しからず、五十貫目まで

の人、十五に出合ひてよし、それも其銀働らかすして居喰ひの人は思ひもよらぬ事」

然らば大石の千五百石は銀幾貫目の身代かといふに、千石の身上は米一石六十目が今にして六十貫目だから、千五百石なら九十貫目だ。九十貫目では第三流の鹿戀を買ふのが適材適所、天神すらおぼつかない。だから撞木町の鹿戀の夕霧だか、浮橋だかと馴染んだのは當然でもあゝる。かうなると大石は浮大盡なんて呼ばれて、日夜だだら遊びの豪遊を極めたのでないことがはつきりする。それと同時に敵を欺くための苦肉の計策といふのも事少しく大袈裟で、一夜千金を擲つほどのお大盡振なら、敵の細作もなるほど、感服もしようが、ほんの忍びの鹿戀買ひ程度ではあまり浮名も立たなかつたらうと、われ等は推察するのである。

おうむ石

(假名手本忠臣蔵)

由良 イヤ勝手へまはれば、仲居が見つけて酒にせう、ア、ア、ごうせう、ム、幸ひこゝにこの様子、是をふまへておりてたも。

小屋根へかければ、

由良 由良の助、梯子をかける、おかるは立つて、この梯子は勝手が違ふて、オ、怖やの、ごうやらこりや危い。

由良 大事な、危なけりや、おろしてやらうか、今は三間づゝまたげても、大丈夫ぢや、

由良 阿呆云はんすぞおりぬぞへ、降りた、おろしてやらう、

由良 ト、後ろから抱く。

由良 アレ、怖いわいなあ、生娘かなんぞのやうに、

由良 逆縁ながら、後ろより、ちつと抱きしめ、抱きおろし、

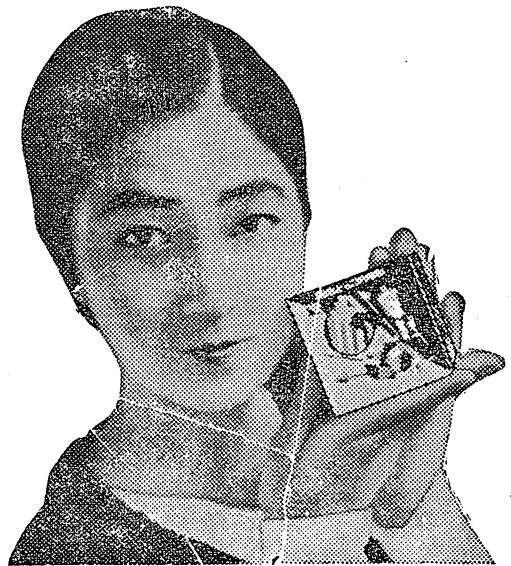
由良 ト、よろしく科あつて、おかる下におりる。

由良 コりやおかる、そもじは何を御覽じたか。

アイ……い、え。

化粧は創作

鼻筋へ、すうウと一本引いた白さ
それだけでも明るさが冴えます。
頬・額・顎・襟へとびる美しさ
それは一つの創作美です。殊に
手間もかゝらず、苦心も要らず
すなほなノビと平らかなツキで
此創作が、いかに容易に完成され
るかを、ぜひお試し下さい。
化粧美は只爰にあるのみです。



千々五郎
白粉は
御園

「瀧の白糸」と「新生さぬ仲」

—古い私の記憶を辿って—

小島孤舟

こんど中座で新派合同一派（東京の）が、晝夜二部興行によつて、夜の部では「瀧の白糸」晝の部では、「新生さぬ仲」を上場する。だが——しかし、瀧の白糸劇化は新興の映畫化から俄然人氣を博して、松竹家庭劇でも先々月レヴェニュー式瀧の白糸劇を上場して、相當の興行價値を獲たらしい。こんどの花柳、梅島兩君を中心とした「瀧の白糸」は先月東都東京劇場で川村花菱氏の脚色によつて上演したもので最近にない好評を得たといふことである。ま

づ私はこの「瀧の白糸」劇について、古い記憶を辿つて好劇家諸氏に告げたいとおもふ。

原作は泉鏡花氏で、これは「義血俠血」といふ題の下に、一つの單行本として春陽堂（？）から發行されたものだったと記憶してゐる。その當時は紅葉先生を首め硯友社一派（小波、眉山、思案、水蔭、美妙齋、柳浪）などの大先輩の作品が、今日の大衆作家の物以上に讀書界に人氣を博してゐた時代でこの人々の作品を讀まないものは、文

藝を語る資格のないものゝように云はれてゐた。その時代に「尾崎紅葉補」と云ふことで文壇に現はれたのが「義血俠血」で、瀧の白糸も同一のものであつた。今の新しい言葉で云つたらば、一大センセーションを起した新人の傑作である。讀むもの大抵は首をふつて感嘆久ふしたものだつた。

劇壇にあつてロマンチストとして人に知られた喜多村綠郎氏は眞先に眼をつけた。しかし、その當時の興行者は「瀧の白糸」といふ新しい作品を上場

することを肯定するほど頭が進んでゐなかつた。喜多村氏は腕を撫で、時を待たつた。で瀧の白糸が劇化されたのはそれから餘程後のことで、書卸しは道頓堀の朝日座だつたらうと思ふ。しかし、大體「瀧の白糸」は人物も少なく劇を一貫して淋しいものだけに餘り見物には受けなかつた。けれども、喜多村氏の「白糸」の役は幕内のものをどんなに敬服させたか知れなかつた。そして、この芝居が、新派劇の中でも、非常に好い物だといふ折紙をつけられたのは、東京新高座で、伊井、喜多村兩氏によつて上場された時からであつた。その時に、喜多村氏の白糸と共に東都の劇壇に、これはくゞと驚嘆させたものは大東鬼城君の裁判長であつた。ナチュラリズム全盛時代だから、喜多村氏の飽までも誇張なしで地でゆく白

糸と、これも芝居氣なしで素地でゆく大東君の裁判長は、兩々相對して法廷の場は芝居といふものを離れて、眞に法廷にあるような氣持に、満場の見物を入れられて、感歎また感歎。劇評家または好劇家はたゞ陶醉してしまつた。それが、都大路の評判となつて新派劇の獨參湯となり、喜多村氏の十八番物の狂言となつたのだつた。

それについての一つの挿話——大東鬼城君は、その芝居で初めて大劇場に現はれた新星なのである。それまでは九州から流れて來て、東海道筋で、武智元良といふ新派の一座にゐた人なのである。つまり喜多村といふ伯樂によつて、地方にうづもれてゐた駿馬が、俄かに金鞍白馬の稱をかち獲たのであつた。ところで、その大東君が二十五六年後の今月今日。また裁判長の役で

昭和の舞台にデヴェューするといふのも喜多村氏の推撰ではあらうが、喜多村門下の花柳君のク白糸クに裁判長で出場するのは面白い因縁であるし、ロマンチックな劇には相應しいロマンチックな話。また最う一つは、その時の辯護士をつとめたのが新派の松助と云はれた故村田正雄氏。こんど又その村田氏の二世高一改め正雄君が辯護士をつとめる。これも何かの因縁。つまり大東君は喜多村、花柳と師弟二代の白糸に、裁判長をつとめ、村田君は先代が喜多村。自分は二代目の花柳君の白糸に辯護士をつとめるといふ奇しき關係をプログラムの上に遺すことになつた。これだけの新派の名作——が何故その後中途うづもれて上場されなかつたか——それは、検閲官が、何と云つても上場を許さなくなつた。理由は、司

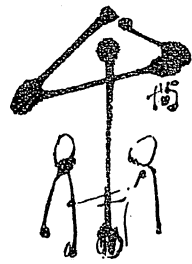
法官が、情婦から學資金を貢いでもらつて、その目的を達してから、法廷で其情婦の殺人事件に、檢察官となるといふことは、司法官を侮辱し司法官の權威を失墜するといふのだつた。その當否は知らず——文壇や、劇壇から云ふと處つては思案に能はずと云つた感がないでもない。

川村花菱氏作ク後篇生さぬ仲クこれは、全然ク生さぬ仲ク即ち柳川春葉氏の傑作であるク生さぬ仲クとは關係がないようだ。だが——しかし、劇中の人物の名が、柳川氏のク生さぬ仲クと同じようなところがあると、關係がないことではないようにも思はれる。だから、全然川村花菱氏作と云ふことは、果して當を得たものかどうかこれは深く考へることで、ちやうど、師尾崎紅葉のク金色夜叉クを、弟子の小栗風葉

氏が、續篇ク金色夜叉クとして、師の書き能はなかつた後を、修補したようなものだらうと思ふ。

ついでだから、生さぬ仲の書卸し當時のことを書いて見る。その最初は、京都の明治座で、靜間、熊谷、都築なると一派で上場されたのがトツプを切つたので、つゞいて(殆んど同時だが)道頓堀浪花座か角座で、片岡我童、嵐徳三郎(後の璃寛)嵐吉三郎、嵐璃玢などの歌舞伎俳優諸氏で上場された。この時新派の村田正雄氏が入り加はれてたようにも記憶してゐる。我童氏の眞砂子。徳三郎氏の珠江。吉三郎氏の日下部など相當にヤンヤと浪花の好劇家を喰したもので、當時ク生さぬ仲ク云々といふ流行唄が、この芝居から流行して、心齋橋の店頭には、眞砂子稿とか、眞砂子襟とか、眞砂子髷とか、眞砂子子髷とか、眞砂子シヨールとか。眞砂子々々で満都は熱狂したが、さすがに人情は敵役の珠江の方には好感を持たずに「珠江」何とか餘り見なかつた。しかし能く味つて觀ると、眞砂子よりも珠江といふ女性の方に却つて同情すべき點があるのが原作であつた、それを新派劇といふよりも芝居の傳統で、眞砂子たゞ一人に同情の集中化を計つたのが脚色者の罪。いや私などもその一人だつたから、今更何とも申譯ない。しかし、珠江に充分に同情するように脚色したらば、生さぬ仲劇は、今日のように新派の獨參湯として、また新派古典劇として残つてはゐなかつた。けれども、東京で新派の人々が上場したときは、亭々生即ち眞山青果氏が全然脚色を替へて、餘程原作とも變つたし、珠江にも

(四十四頁へ續く)



梨園あれこれ

長野吉高

いつか本誌上で、李笠翁のことをホンの一寸書いたと思ひますが、ご時節がらのためかあれに就いてろくお賃ねに接しますので、あらためてこゝに一言、述べて置きます。李笠翁に「笠翁十種曲」の作があるとは前に述べたとも思ひますが、この十種曲は早く我國に傳り、徳川時代の戯作者や小説家で笠翁の名を知らぬ者は恐らく無かつたでせう。あの八文字屋本あたりは、この十種曲からそのネタを多くとつてゐます。十種曲とは、云ふまでもなく十篇の戯曲を集めたもので、何れも奇抜な趣向をこらしてゐますが皆んな喜劇的なもので悲劇はありません。笠翁は喜劇論者

で、芝居は喜劇でなければならぬと主張した人でした。「一體、芝居といふものは我々の愁ひを消すかためにあるものだ。それに何を好んで金を出してまで涙が買ひたいのか、自分は戯曲を書くが悲劇は作らぬ——」との意味のことを云ふてゐる程です。笠翁に有名な戯曲論がある、とはこれまた前に述べたと思ひます。これは六目に分けて作劇法に就て細論したのですが、こゝに其の一部の要點だけ簡単に述べてみませう。「芝居は勸善懲惡主義なること。脚本の主題を明確にすること。古人の趣向したることや辭句を盜襲せぬこと。一貫した筋で矛盾のないやうにすること。事

件に枝葉をつけ過ぎて複雑にせぬこと。荒唐無稽にせぬこと。實録と架空なことは區別し古人の姓名を引き出して無關係なことは書かぬこと——この他に詞采とか音律とか寶一とかに就て、詳しく例をあげて論じてゐますが、これ等は支那劇獨自なものです。従つて、専門に研究してみませぬと一般の人には了解がなかく、困難だと思はれますからこゝには述べません。

笠翁の作つた戯曲は、十種曲の他に六種、合計僅かに十六種しかありません。その數からみれば我が近松に及ぶべくもありません。然し重要なことは、寧ろこんなことよりも近松と笠翁の作劇理論なり作劇態度で、そこに根本的な異點があることを忘れてはならないのです。故に、兩者の比較同視など思ひもよらず、あの太田南畝の粗忽は洵に遺憾ともいふべきでせう。

因に、目下「演藝叢報」誌上に拙稿「歌舞伎と支那劇とどこが違ふか」と題して連載してゐますから、それと参照

して下されば更によく了解されるでせう。

○

支那の芝居と云へば、一頃流行した戦争劇や、それに似た現代物なら論外ですが、古い時代の支那ものを舞台にかけるとなると、これは見方によればさう簡單にゆきませんこの點では、先日亡くなられた松居松翁氏など最も信頼の出来るよき演出家だつたと思ひます。

たしか昭和六年の一月、東京の明治座で岡本綺堂氏の作「水滸傳の林冲」の舞台監督をされた時、ある場面を小村雪岱畫伯に依頼して墨畫の背景にされたことがあります。當時松翁氏は、これが大變に得意だつたと聞いてゐます。見やうによれば、何んでもないこのやうですが、これはよく支那物のコツをつかんでゐるので、心ある者から見ますれば、笑ますにはゐられない出来榮えです。勿論あの時は、綺堂氏の脚本も立派でしたが、また松羽氏が支那物の演出には、尋常の人の及ばない手腕をもつてゐたことも否

めません。劇壇は、實に惜い人を失つたものだと思ひます

十月は、歌舞伎座の開場一周年なので、東西俳優の合流を切に望んでみましたが、果してこの期待を裏切りませんでした。「忠臣蔵」では、鴈治郎が勘平をやるとか洩れ聞きしました。元來、私はこの役は非常にやり難いものだと考へてゐます。何故なら、一體この六段目には作劇法から見ても一種のカラクリが用ゐてあります、名づけて錯認法とでも云ひませうか。これには理由があるのです。

○ 「忠臣蔵」の作者の一人、竹田出雲が「大内裏大友貞鳥」といふのを書き、當時近松にその評をして貰つたことがあります。この作には兄弟が身代りになつてゐるのを知らずに二人の女房が互に自分の夫と思ひ違へて争ふくだりがあつたのです。近松はこれを評して「見物はこのいきさつを先に知つてゐるが、芝居の方では知らぬものとして争ふ、こ

ゝが見物に受けるところだ」との意味のことを云つてほめたさうです。果して、これは上演して好評だつたことです。後年、出雲は「忠臣蔵」にこれを應用して、勘平が勇殺しないで、見物の方で先に知つてゐるのに、勘平はそれを知らずに腹を切る、といふやうな趣向にしたのです。これが作劇法に於ける錯認法です。見物が知つてゐることをやるのですから、それだけ勘平は巧くやらないとダレてアクビものになる憂ひがあります。これ等の意味で、勘平の役は「忠臣蔵」の中でも極めて難役の部に入ります。鴈治郎の自重を望んでやみません。

○ 錯認法と云へば、實に面白いのが支那にあります。明末の阮大鏡が「春燈謎」といふ戯曲を作つてゐますが、これは一の錯認法で錯認でプロットを立てゝゐます。その趣向の新奇なことは支那戯曲中の頭角です。十箇の錯誤から色々事件が變轉するので、別に名づけて「十錯認」とも云ひますが、とにかくかうした錯認法を自由に用ゐてゐるのは、東西洋とも、他にあまりその類を見ないでせう。

の私

持役を語る

到着順

中村 魁車

名和長年の堯心を是非やれとの事で過分の大役で只々恐縮してゐる次第です。堯心と云ふ方は前身は醫師でありました。ふて、ごく線の柔かい虚弱な人で尤も盡忠の士で、私のよふな役處ろの違つた者にどのへんまでその風格が表現出来ず事やら内々苦心を致して居ります。幸ひに私を最負にして下さつて親しく交つて頂いた齋界の大家富岡鐵齋先生をヒントに得ました。

鐵齋先生は以前神官であつたそふて其

後心境轉換され齋壇に重きを成された方で其性格風雅まことに堯心と云ふ方の様に思はれます。實に想像するに難くないのであります。

私は心中富岡先生を偲びその風格を連想しながら今度の堯心を懸命に舞臺に立つ覚悟でございます。

市川右團次

今秋歌舞伎座出演に際し私に配せられたる持役は左の五役

忠臣蔵 三段目 若狭之介

四段目 薬師寺

六段目 判人源六

名和長年 信濃坊

所作釣女 大名

この度の持役中忠臣蔵に於ける判人源六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

六と名和長年の信濃坊二役は初役であります

澤村宗十郎

山間に紅葉いろどり、彌々都も観劇のシーズンと成り、定めし道頓堀も賑かな事と思つてゐる矢先に、今春以來久振りのお招きうけ懐しい皆さんのお顔を拜見なし得るかと思はれ喜んでゐる次第です

私の持役に就ての御注文ですが、忠臣蔵の判官はいわば澤村家の家の役で、先祖以來色々の型も残されて居り、不肖私も是迄先代の型を參酌して度々演じて居りますが、皆様のお氣に召すやら只今から心に勞して居ります。一文字やお才は初役です、主役の成駒家さんに邪覺に成らぬやう演出致したいと心組んでおります、新作堂島繁昌記の稻垣の役は原作者大村さんとも御相談して役の本根を研究致し、せい、その性格を顯し原作者の意中にある人物を演出致したいと思つております、釣女は度々上演致しましたが物で定めし皆様も御存じの事と思ひます、只私が勞しており升のは、道行なのですが、成駒家さんの娘さんの晴れの舞臺に、果して成功なし得る演出が出来得やうか、助演が返つて難演になりはしませんまいか、たい随分と年違ひの私が、この程度までに若返れますか、その邊を眞味の的に御観劇の程をお願ひ申して置ます。

助高屋高助

私は父と共に本年は二度の御目見得で度々の來阪は心嬉しく思ひ居り升が定めし皆縁方も又來たよと、ごうやら私も厚かましき様に考へられ升。此度東西の顔合せに忠臣藏の件内を勤めますが、前は父が道行の件内を勤め作は道行の無い三段目の二代に渡る件内で「唐縁で書く三代目」とやらで二代、三代は中々初代の様には参りませんが、高助の持味だけ大様に御覽願ひます。夜の部の堂島譚の手代安五郎も初役では成駒家の叔父さんの出し物で一際差しずを願ひ勤めま

次郎吉流れ星で私は桑田武助、馬でお

河原崎長十郎

からの積吉、猿飛佐助で佐助を勤めます桑田武助は、所謂大衆小説へ出て来る怪し氣に立廻つて事件をあやつる人物で私はせいふのつそりてやらうと思つてゐます。それにその扮装や、動き、科白の面白味や、妙にひくれたやうな性格も、中々面白い役で、どういふ風に出來上りますか？

一體にこの次郎吉流れ星は、誰もが相當、式の上で、繪になつてゐないといけ

ないのではないかと思ひます。馬の積吉は、とても人のいふ百姓の爺さんで、都會から離れた田園に宿つて、しかも世間とは取引の少い、極く家族的に一生をすごして來たさ云ふ形の百姓がちいつとばかり、今の世の中に於て苦しまさせられてゐると云ふのでこれは私達の様に都會で育つたものには一寸想像されない様な田園生活の一面を感じさせるものですが、それだけむづかしい役なので私の持味がうまくこの作を生かしてくれ、ばと願つてゐます。殊にこの作で使はれてゐる紀州の方言には苦心しました。

猿飛佐助はお馴染の忍術つかひ、とても滑稽なナンセンスもので、ドロ／＼と忍術をつかつたり、いわゆる新様式の喜劇なのでどこまで調利させてゐるかい問題です。

以上三つの役、果して成功してゐるか宜しく御指導下さいまし。

中村 亀松

今度私は流れ星次郎吉で弟分の清市、馬で老婆ぬい、猿飛で奉行の三役を受持つて居ります。何れも只一生懸命に演ると云ふ以外に何の豊富も持つて居りません。私達は今は實際無我無中で舞臺を務めて居ります。

私の受持つた三役内の老婆ぬいですが、これは現代劇であるだけにどうしても女形男優ではいけません。老練な女優さんの役だと思ひます。只さへ未熟な私達がこういふ條件のある役を務める事は演劇そのものに對しても非常に不忠實だと思ひます。しかし現在の前進座の場合に敢えてその無理な役も私達で演つてゆかねばなりません。しかし私は一度その役を引受けた以上、決してひるみません、大膽に細心に他の二役と共に全力をあげて務めます、ごうぞ皆様のお力で私達の技術が一日も早く一人前になり、前進座が大阪の一流劇壇とも相居ならべる様になります様御支持の程をお願い致します。

持役を語る

河原崎

國太郎

持役を語る

第二回道頓堀進出に、私は次郎吉流れ星と猿飛佐助にお琴とお秋との二女性を振りあてられました。

次郎吉流れ星は御存じの通り子母澤寛先生の御作、作中お琴と云ふ女性性は常盤津の師匠で元は櫓下の藝者、それを氣にそまない男に落籍されたが意中の人のために身を守り、純情を捧げると云ふ職業柄に一寸珍らしい可憐な女です。

私、此の役を受けましたとき、且つて前進座が演りました長谷川先生御作の振分け小平のお葉、又は村松椿風先生の御作の人間飢饉のおつうと頭の中で混同致しまして困却いたしました。

私の容姿が娼婦型であるため、今のいづれもが私にとつては所謂あてはまる役柄とでも申すのでございませうか？それだけに又細心の注意を怠ると役の上に個性が露骨に出すぎて、どれもが全部おなじ人物になつてしまふおそれが充分にあると思つて居ります。無論これは私自身いたらない爲ではございませうけれど、そのいたらない内にも懸命に努力いたして居ります。

且つてのお葉、おつう、二女性と同型

の女で、それとは全然違つた人物を表現できますればと念じて居ります。御観劇の上、お氣付きの點あらばどしどしと御鞭撻の程、伏してお願ひ申し上げます。

前進座 中村翫右衛門

道頓堀第二回進出、浪花座出演の持役は、次郎吉流れ星の次郎吉、馬、長男竹一、猿飛佐助の三好清海入道の三役で序幕から最後迄、出すつぱり云ふ譯です。次郎吉は旗本の作で道樂から、やくざの群に入り、ついに盜賊に迄成り下がつて居る男で、親不孝であり乍ら、親の事がわすれられない非常に感傷的な一面と朗かな、一面を持つて居ます、しかも腕は剣道の奥儀を極めてゐて、武士の生活をきらひ最後は親の仇を尻目に、女に生きる、其處に一寸ほんのり現代味を持つてゐる涼な氣がします。

演出法は主として、歌舞伎の世話物の味を加えるつもりで、合方等も出来るだけ取入れます。そして出来るだけむつつかなく理屈抜きで大衆文藝的な興味を生かしたいと思つて居ります。馬の長男竹一は、田園に育つた無智で、しかも鈍な性格の持主、生活難をどうしたら防げるか、と云ふ事をない頭で考へ乍ら、眞實の解決に行當らず、馬をころせば父が働く様になるだらうと淺薄な心で放火すると云ふ役です。

初演當時から組州の方言をとてまやかましく演出家に注意されましたがどうもうまく行きません、殊に大阪では組州に近いだけ、氣がひけます、やりかたは深刻な内容の中に何處か田園生活のまんびりした空氣を出す様にして居ります。猿飛の三好は、立川文庫おなじみお伽噺の豪傑、非常に朗かに、いさゝか脱線しかれまじき、と云ふ程、理屈ぬきのナセンスなやり方をする考へです。

七月の第一回公演には健康を痛めめて皆さんに非常に御心配をかけたましたが、今度は健康も取戻しましたから、元氣一杯に、全力をあげて舞臺に精進する覺悟です。

その役をどう生かす、どう性格を表現するか云ふ事は最も大切ですが、今の私共は夢我夢中で、只々、一生懸命と云ふより外ありません、初日も迄てきます。心配と、嬉しいのと、何んだかむづ／＼してゐます。

花柳章太郎

瀧の白糸この位役と名のピッタリとしたものは少ないでせう。泉先生のお作は今更私共が言葉をはきむ必要はないのであります。

然しその主人公その他各編に活躍する處の人物の名のうまさつたらありません。

昔から多くの男女の心中を書いたその中のものてたさえば小糸治兵衛。お染半九郎三勝半七さの小糸佐七とかいろう。お染半九郎三勝半七さの他、白糸欣彌と云ふ名はなつかしきがあります。

婦糸圖のお蔭主税通夜物語の丁山清なぞ實に忘れられないいゝ名前だと思ひます。ことに瀧の白糸の場合に内容とピツタリしたものはないと存じます。水藝にもいろ／＼の苦心をいたしました。今度私の四役の中で最も氣乗るものですがそれも一つは瀧の白糸と云ふ名に魅力があると思ひます。白糸に約しての近詠二三お笑ひまでに：
：添えます。

水藝をつとめて
白糸の名の涼しさに吹き分けん

この扇この盃の涼氣かな
日盛りのお笑ひ草や水いぢり

梅島昇

「生さぬ仲」は昔の脚本と違つて川村さんの創作で、新派悲劇の「生さぬ仲」と餘程縁の遠いものになつて升。私の役の倭作も大分以前の役とは異つた味を出さなければならぬで弱つてゐます。「瀧の白糸」も川村さんが手を入れて昔の味が逃げた處もあり、又實に面白くなつた處もあります。

私の役の欣彌は、昔のまゝで演ると最近活動寫眞で、御覽に入れて居るだけに不自然なやうにもなるので困つてます。

でまあ、キネマはキネマ、芝居は芝居さ云ふ考へで、なるべく昔の色を出して演らうと思つてゐます。

小堀誠

一番目の「お月様と與太者」は八月の東劇で上演したもので私としては淺岡了介の役を暑い折ではあり夢我夢中で演つたのでしたが意外な好評を博しました。「瀧の白糸」の新聞記者結城朝之助は初役でこの狂言は餘程前上演されて纏まつた記憶も無く目下稽古中で今の處別に語るべき感想は有りませぬ「城山落城の日」には下僕吉右衛門を勤めますがこれは確か昭和四年二月市村座で勃興當時の新派が今度の配役と殆ど同じ顔振られて上演したもので變つてゐるのは子役位のものですこれは全國に放送も致しましたし私等には馴染の有る狂言ですが何しろ舞臺が鹿兒島だけにあちらの誰を出すのには人知れぬ苦心をいたしました今度もこの誰にはどうも内心氣になつてゐます

英太郎

城山落城の日此の劇は登場人物の全部が鹿兒島辨でありまして臺詞よりも此の鹿兒島辨で苦勞致しました。

喜多村先生の西郷夫人役始め三人の少年私の西郷の姪光石役、大矢氏小堀、梅島氏、伊志井氏等全部鹿兒島辨なのです、大人はいゝさしても子役に此の鹿兒島辨を教へるの骨がおれませぬ、私はある鹿兒島の婦人に脚本を見せさせて臺詞云ひながらそれはそうぢやない、こふ申すと、二三日ついで稽古をしてもらつてそれを又三人の子供に教へたのです、兎に角言葉で大分苦勞を致しました、お國訛りの中でも鹿兒島は一番難しいです、男子は兎も角女子は一段難しく思ひました。此の劇初演は市村座で今度中座で演ずるのは二回目です役割は初演と殆んど變りはありませんが子供が變つて居るぐらゐなものですよ、少し堅い劇ですがしつかりした眞山先生の傑作で初演には大好評でありましたAKより全國中繼放送致した事があります。

その他一葉原作の瀧り江では源七の女房お初ですが初役です、目下稽古研究中です、其他玉枝とカポネと云ふ不良を致し升

持役を語る

九月の南座

劇評

◇九月の上旬を神戸の松竹劇場、中旬を京都の南座といふ風に一興行を二分して、井の上、水谷、亀藏、嘉久子らの各派男女優合同劇が西下した。興行成績は兩座とも非常な好況だったと聞いたが、舞台成績もまづ相當の佳作が揃つてゐた。

◇第一の眞山青果作「お夏清十郎」は去る六月の東劇で我童水谷らによつて初演されたもの。大體の骨組みを西鶴の好色五人女に採りそれに新しい解釋を加へて各登場人物を巧みに活躍させてゐる。特に戀愛に對する二つの異つた態度を與茂七と清十郎の二人によつて明快に對照させたところなど、この作者らしい手法である。

◇水谷のお夏は序幕の濱遊びの場における思ひ上つた娘ぶりを始め持味だけで十分の効果をあげてゐた。但しこれは原作者の責任だが

このお夏は第一幕とそれ以後とは性格が全然一變してゐるに拘らず、その説明が書き足りてない。男の情熱を知つてからの心の動きをモット表面的に取扱はないと、観客は首肯し兼ねる。龜藏の清十郎は何處かジメついた感じで原作の要求する魅力に缺けてゐたが、田之助の與茂七は案外上出来だつた。紅梅の兄嫁は問題外の配役だ。

◇第二の北村小松作「港の灯」は類型的な舞台で新味はないが、簡單に纏つてゐる點がいい。井上の父親政吉は娘の物語をベツトに彫かけたまゝジツと聞き入る間の巧さを特筆する。水谷のその娘文字も勞せずしてその人らしく描れてゐた。柳の與太者はやゝ新派めく

◇第三の中野實作「女優と詩人」では嘉久子の女優千繪子が大いに活躍し、そして大いに佳作である。柳の友人能勢君もどつか間拔け

一 廣 口 山

た調子がなかく面白かつた。

◇第四は獨歩原作の「酒中日記」である。「酒中日記」は新派の代表作といはんより井上正夫個人の代表作だといふのが一番當つてゐる。それほどに、この一篇における井上の演技は素晴らしい完璧を見せて、作品の古さと内容から來るいろんな疑點や矛盾を馬鹿々々しく思はせながらも尙且つ鋭く觀客の胸に迫つて來るのは流石に偉い。今度の演出は時間の都合が可成り省略されてゐるが、赤坂新町母の家で醉態の軍人を出さなかつたことや山王社で鞆を拾ふあたりの大河校長の焦慮を十二分に見せなかつたのはどうかと思はれる。水谷のお政は持味の艶と明るさを隠すべく最善の努力を拂つてゐたのを認めたい。藤村の三輪訓導は持役だが台詞の通り難いせむか前牛がモ一つ映えなかつた。

米津の母親は幾分善人めくのが惜しい。吉田の升屋老人はチト騒々しかつた。

終

ケネン ト号



萬人愛好の 優良車
國産品中の完璧 是非御覽衆を

市内特約店ニアリ
株式会社 大澤商會
京都山三條通小橋西

感乗試「車列樂享」

九月の角座で、華かな處女運轉をした（享樂列車）

その名稱は、映畫の「極樂特急」からヒントを得たらしいが、フービーをモットーの同劇團を、如何にも端的に、如何にも鮮かに云ひ現はして成功だつたが……

さて其試乗感とは訊ねられると脱線承知で些か妙にカーブしたボクの主観に當嵌めて見る必要がある。

主宰者―機關手である中田正造君はフリーランサーの劇壇人と映畫人、スター女給にジャズ・バンド藝妓、それに花月から九里丸まで同乗させ、豊富なバラエチイと各方面にウキンク出来る興行價値の多さを狙つて……もつとハツキリ云ふと組見政策をも充分考感に入れてゐる點、中田クンの興行的手腕もソウトウなモンである。

だが、それがためメンバーは随分と混成的なものになつた。

或る見物は「かやく飯みたいや」と洒落た評を加へたが、ボクはさうとは思はない。

その雜然とした寄合世帯的なムード、一視新開地的な舞台感に、或る氣易さを覺へる、へんな聯想だが今里新地と共通した大衆味がある。

同癖には「これは」と思ふやうな本筋の落武者もあれば、惡達者なインチキ妓も居る、また違つた世界から飛込んだ女などが、孰れも雜然と働いてゐるので、反つて面白く遊べるのだ、大衆にはインチキを喜ぶ悪い性癖があるから、傳統や完成品を疎じる、詰り絶へずワサ／＼とした甘い低調な處へ客は集まるだから「享樂列車」も或點までインチキであり、低調であつていゝ、萬歳を顔負けさせる

二 慶 谷 鎌

の結構！

唯もう少しフレツシユさが欲しかつた、要するに脚本難に歸着する、僅かに新版と銘を打つても前演で中田の傑作と定評づけられた「ガラ政どん」が唯一の收獲では些か心細くもある。

其次に擧げるなら「臍と撮影所」のスナツブに現はれた、所謂今里氣分だ。

トリツクのテーマがピン呆けになつた「速い船脚」と、配色的鬻物の「市之巫と丑松」は話らない、殊に各主役の南光明と、月形龍之助が銀幕から轉向すると、些か河童の水放れの感だ、玉川みちみのガラ政社長の娘のフリップパーが一番まで、それから比較すると女給である小松夢野と仲上八洲子の方が案外出来てゐる。

舞台俳優側では「ガラ政どん」の中田のガ

ラ政社長、山口の社員、桑平の秘書が道かに人物描寫に成功したが、ボクとしては其他に「臍と撮影所」で池永浩久をモデルにした田中聖一郎の専務の悪戯な技巧を買つて良い。

試乗感も是れでは、甚だ雑莫なものになつて了つたが、要するに持味だけで素人にもやれる優れたスケッチ的な喜劇脚本を求めて(一番難かしい仕事だが)、

絶へず各方面からの新しいメンバーで攪拌し、陥り易い劇團のマンネリを避けつゝ、つねにワサ／＼した興味に鑿進すれば(享樂列車)は半永久的に満員疑ひなした。

萬事は今里趣味々々々々、中田君、ボクの云ふことが解るでせう。

(一九三三、九、二七)



曾我廼家十吾

◆老ひの淋しみ……。

溝の側の夜店を漫歩する私……、冷え
びえと肌へにしみる澄徹の夜氣は、そぞ
ろ夜の深さを思はせます。

大資本の翼を魔物のように擴げて、小
賣商人を壓倒してゆくデパート萬能時代

に、これは亦、依然として古き姿の夜店
それが此の雜間です。

やつぱり日本人は新を求めつゝ、舊を
捨て難い氣持ちが、心のどこかに潜んで
ゐるのだからと、妙なセンチに襲はれ乍
ら、人の波にもまれ、流される私の前を
歩く四人連れ……、これが亦デパートと
夜店の對照をしのばせる一組なのです。
もう六十路の坂を越したちしいお婆さん
と、その孫らしい十七八を頭に三人の斷
髮の娘さん……、お婆さんは堪らなく可
愛げに、孫達を抱へ込むようにして歩い
てゐますが、娘さん達はその愛の手をさ
も五月蠅相に拂らひのけよう、拂らひの
けようとしてゐるのです。……、その
内にお婆さんは下駄屋の前に立ちました
娘さん達は見向きもせず歩いて行きま
す。

化粧品屋の前で立ち止つた姉娘が始め

て氣づいたのか、一番末の娘さんに向つ
て……。

「美ちゃん、お婆ちゃん……」

「向ふで下駄を冷やかしてはるねんわ……」

……。

「姉ちゃん、チャンスやは、ほつといて
スポーツでお茶飲もうし……」

中の娘さんは此の機會を待つてゐたらし
いのです。

「ふん、美ちゃんあんたお婆ちゃんと一
緒に廻りで……」

「うちイヤやく……」

娘さん達が、自分をマク相談をしてゐ
るとも知らずに、お婆さんは孫三人の下
駄を買つて、きよるきよると搜しながら
こつちの方へ來るのです。

目ざとく見つけた末娘は無言で姉二人
の手を引つ張つて、人の渦に消へてしま
ひました。

夜店をひと廻りした私が、橋筋の四つ角へ出ますと、下駄を提げたお婆さんがはぐれた孫を待つてゐるのです……。眼に入つても痛くない程可愛がる孫にさへ、うとまれのお婆さんの淋しさが、私の胸にも鈍々と感じました。眼のさきには巨大なデパート、横丁には夜店、こゝにも世の中の皮肉をまざまざと見せつけてゐます。

◆忘れ物……

或る淋しい街角でした。巡査派出所の裏手に共同WCがありましたので、生理的作用の勘定に迫られていた私は、いそいで飛び込みますと、正面の網棚に上品な色の風呂敷包みが、持ち主の來るのを待つてゐるように残されてゐるのです。

大…の扉を覗きましたが、二つとも使用中の赤文字が出てゐません、此の共同

WCには私一人より人間はゐない譯です。臆かに忘れ物です……。

羽二重の風呂敷から想像しても、包まれた品は相當の物と思はれますので、此の儘にしておいて、モシ悪い量見の奴に猫婆をされては……との老婆心から、一たん出かけた私は後戻りをして、其の風呂敷包みを派出所へ届けました。警官立會の上で中を開きますと、立派な錦襦のケサ(あの坊主の掛けるケサです)と、大丸の商品切手と畫帳が出て來ました。「慌て坊さんの忘れ物らしいねえ……」と、警官は微笑しながら畫帳を開きますと、そこには極彩色の苦筆で畫かれた濃艶極まりないエロ繪が現れて來たのです。

「うわーッ……」

頭狂な聲をあげて覗き込んだ私の眼と警官の眼が合致した時には、もう畫帳は閉ぢられてゐて、警官は威嚴のこもつた聲で私の住所姓名を聞いてゐました。

エロ繪と錦襦のケサ……此の奇妙な取り合せに、派出所を出た私は、腹を抱へて、忍び笑ひをしながら角を曲らうとしますと、其の前方から、六十近い老僧が小走りの慌てた足どりでやつて來て、共同WCへ這入つたのです。

「ハハーン、さてはあの坊主の忘れ物か……」

定めし、風呂敷包みがないので、驚ろいてゐるだらうと、私は物好きにも、ソーツと後戻りをして、WCの内部を覗いて見ますと、件の老僧は股をひろげて、さも心地好き相に、小聲に經文を口誦みながら、生理的の勘定をしてゐました。

◆親の眞似……

デパートの陳列場は、見る者の所有慾をそゝるようにならゆる色彩で飾り立てゝゐます。

まして、子供は見る物が欲しいのです

「……。だから、子供連れのママさんは成る可く子供の欲しがり相な陳列場は駆け足で、自分の欲しい物の前では、子供がどんなにせき立てゝも落ちついてゐらつしやいます。それが却へつて、子供の所有慾に拍車をかけてゐるようです。」

「或るデパートの四階、お子供用品玩具類の陳列場です……。」

六つ位の坊つちやんを連れた中流のサラリーマンの奥さん、コリント、テーブルに見とれてゐる坊つちやんを無理に引き立てゝゐるのです。

「お母ちやん、これ買ふてえナア……。」

「そんな無理を云つてると、置いて行きますよ……さあ、早く行きませう……。」

「……。」

「漸つとの思ひで其處を離れさすと、今度は電気機關車の前です。」

「お母ちやん、コレ、コレ……。」

「またツ……、いけません……。」

兩手で引きずるようにして連れて行きましたが、とうとう繪本の前で坊つちやんは台に掴まつて離れません。

「あなたは何故そんなに見る物、見る物が欲しいんです。お内へ歸へつたら、お父さんに云ひつけてあげますから……。」

強く叱られて、泣くかと思ひのほか、坊つちやんは平氣で……、

「かまへん、お母ちやんかて、お父さんがポーンナス貫ろて來た時、僕みたいに云ふてたんやもん……。」

ズバリと辛辣な一言、秋空高く外野の塀を越した大ホームランです。

「まあ、此の子は……。」

と、叱るのも口の内、奥さんの顔はトマトのように眞つ赤になつて、そつと周を見まはしました。

一終一

(三十頁より續く)

同情のあるようになつた。喜多村氏の眞砂子。河合氏の珠江。これが瀧の白糸と違つて、東京でも大阪でも、何遍もくも繰返して上場されいつも興行的價値をあげてゐる。彼の虎に扮して第一人者(?)と云はれた藤井君の虎の書卸しは、河合氏の珠江が虎を愛して、その虎に禍されるといふ外國物からヒントを得たものによつてゝあつた。その喜多村、河合兩元老の眞砂子と珠江の二役がこんどは花柳、英の兩君によつて中座の舞台にデビューする。だから新クとク生さぬ仲クの上へ書かれても好いようにも考へられる。時は昭和八年十月。生さぬ仲の四文字が番附の上に現はれてから、もう三十年近くにもなるような氣持がする

(八、九、二十五日)

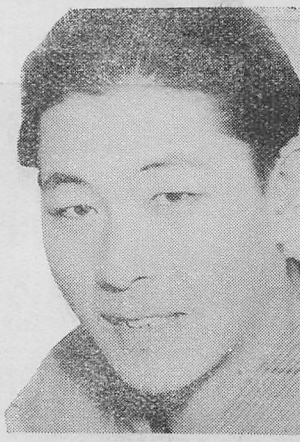
道頓堀名物強壯料理

フジ井

(道頓堀辨天座西筋向ヒ)
電話 七五八二番

レコード
喫茶





堀正夫期待

森田信義

堀正夫——寶石工にとつて

も、寶石商人、鑑賞家にとつ

ても、楽しみな大粒の寶石、

これが今の彼だ。今でも素地

の光澤は輝いてゐる。これに

充分研磨がかゝつたら……そ

れ故にこそ、吾々もこの石に

楽しみを持つのだ。

凡そ寶石は、それが優れた

ものである以上。

1 フレッシュユでフレクシブルな感覚。

2 大膽明快な事象への把握

3 表現のタッチに明示される個性。

4 しかも、その表現の豊富

な多様性。

當然、これらの要素が、截

斷面の角度から燦然輝いて

ゐなければならぬこと勿論

である。

で、若し、これらの一をも缺

いでゐるなら、それは所詮駄

石の名に甘んじなければなら

ないもの、第一流の寶石たり

得ぬこと云ふまでもないので

ある。

が、現實は……

これを俳優の現實に觀やう

——と、この群落には、又、

何故かうまで駄石が多いのだ

らうか。彼れ然り、此れ然り

1 あれば2 なく、4 あれば3

なし、中には1 から4 までき

れいに持つて來るのを忘れて

たゞ代りに厚顔無恥だけを持

つて來て舞臺を横行してゐる

などといふ佻しいのすらある

淋しい話!

では、近年吾々の前に輝い

た寶石は——水谷八重子氏だ

つた。それから、その他には……

新鮮で強靱な、例へば六月の朝、草の香をかぐやうな俳優を、吾々はいつも待つてゐるのだ。

偶々堀君が現はれた。一時轉向してゐた映畫から演劇へ

歸つて来て、新聲劇の舞台へ漂はせたその草の香!

それから今日までの半歳——彼は、眞實の把握に於いても、表現手法の個性に於いても、そのガツチリした肉體同様の、頼もしいものがあることを吾々に見せてくれた。

これからは、唯、年若い彼が、彼自身に加へて行く切磋琢磨だ。

これは難かしい、或ひはこれこそ至難最大な人間大を爲すの要件であるかも知れないのだが。

良い寶石はみなどんな研磨

を経験して来たか! 安易に逃るな、安易に! 堀君の斯道に對する情熱はきつとこの困難をも困難としないであらうとは信じるが、敢て婆心に及ぶ所以——即ち、君を期待する所以である。

—終—

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品

國產金鶴印

ウキンスキ
ブルモンド
キユラット
ペパーミン
ジパロミント
滋養葡萄酒



發賣元 横山商店

株式會社

大阪市東區豊後町三番地

電話東(94) 一六六一
三〇二三
四六四九

編輯後記

秋爽やか——、まことによい劇劇シーズンです。

さて歌舞伎座は鴈治郎、福助、魁車、右衛次、長三郎、市藏等の關西大名題に東都より幸四郎、宗十郎を迎え、假名手本忠臣藏(晝通し)河庄、名和長年、新作堂島繁昌記等名狂言を揃へての大歌舞伎、好劇家諸様に歌舞伎の真隨を充分味はつていたゞけると思ひます。

中座は久方ぶりの東京新派、浪花座は前進座の第二回公演、それ〴〵異なつた領域にその持味を發揮して觀客を陶醉させてゐます。

こゝに特筆すべきは、津、古靱が過去の一切の感情を清算して、土佐と共に、三巨頭八ヶ月振りの提携。若手を揃へて文樂座十月本

格興行となつたことです。

これは郷土藝術文樂の爲に、まことに喜ぶべきことです。

本月は吾が大版歌舞伎を中心とした。オール歌舞伎號といふブランの下に編輯にとりかゝつたのが、原稿をお願した諸先生の御都合等もあり、それ等の記事の大部分が御執筆願へなかつた事は誠に遺憾に存じます、但し久々で富田泰彦先生に「河庄」の玉稿をいたゞき高安吸江先生に「鴈治郎丈を鞭撻するといふこと」なる御寄稿を得た事は大きな收穫として厚く御禮申上げる次第です。

新しい試みとして、カラーページを作つて見ました、妹背、酒井、富田三氏の漫畫忠臣藏と小山紅露氏の新派オーム石を収録しました。讀者諸氏の御批判をお願ひ致します。

— 滿 彦 生 —

昭和八年十月一日發行
月刊『道頓堀』第八八年
雜誌『道頓堀』第八十五號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾五錢 (郵錢五厘)

昭和八年九月廿日 印刷
昭和八年十月一日 發行

大阪市南區難波新地三番町

編輯兼 發行所 鳥江 鏡也
共同編輯 山上 貞一
印刷所 道頓堀社印刷部

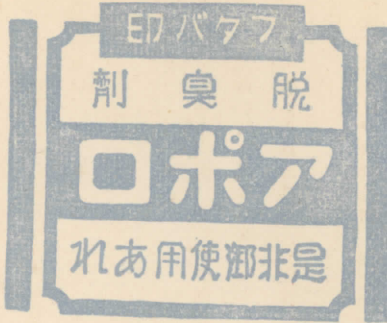
大阪市南區難波新地三番町
(大阪歌舞伎座内)
松竹興行株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部

便所の防臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



（一定瓶小大 金五拾錢 金壹圓）



△使用法

一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減する事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

家庭必備品

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、このまま撒布すれば宜敷いから少しも面倒ではありません。

「アポロ」ハ他の薬（カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが残りぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かです。から經濟にもなります。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

發賣元

電話本局三三三番
替穴三三三番
七番

光榮商會

大阪見町三丁目
東區

昭和二年十月廿五日第三種郵便認可
 昭和八年九月廿一日印刷
 昭和八年十月一日發行
 (每月一回發行)



「道頓堀」第八十五輯 第八年十月號

陣 初

主演 社入 第一回 林 敏 夫
 監督 島 泰 三
 脚色 原 三 泰 島 冬

吉浩田高・郎太好東坂・郎二長林
演出助贊別特 助之橘東坂・郎五榮上尾
 郎三井澤・郎靖賀志・郎四重林小・哲井坪
 一正田藤小・助直橋・三京木冬・助之錦松高
 演 助・子光尾高・子菊岡花

一部 金參拾五錢